被爆二世・三世
そして未来世代の健康を守るために

被爆二世・三世健康調査アンケート結果報告書

2024 年 1 月

京都「被爆二世・三世の会」

〒604-8854 京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラボール京都 5 階 京都原水協気付
TEL:075-811-3203 FAX:075-811-3213 EMAIL:web@aogiri2-3.jp HP:http://aogiri2-3.jp

目　次

はじめに　アンケートにご回答いただいた皆様に感謝　3

京都「被爆二世・三世の会」の「被爆二世・三世健康調査アンケート」の概要　4
　1、調査期間
　2、調査の方法
　3、回答者数と内訳

第Ⅰ章　回答データからみる被爆二世の姿　5
　1、健康障害を経験してこなかった人たちの割合　5
　2、森川聖詩さんの著書『核なき未来へ』から　5
　3、被爆者への「健康管理手当」支給対象の11障害を経験した人たち　7

第Ⅱ章　自由記述回答から明らかとなる被爆二世　～　被爆二世の仲間たちに起こってきたこと　8
　はじめに
　1.　体が弱く、疲れやすく、さまざまなトラブルに見舞われてきた　10
　2.　疲れて寝ることが多かったこと、休んでいたことが多かったこと　10
　3.　貧血が多く、倒れることが多かったこと　12
　4.　足の痛みや関節痛に襲われること、骨折などが多かったこと　12
　5.　特に夏や冬、季節の変わり目に弱かったこと　13
　6.　冷え性、暑がり、多汗症だったりしたこと　14
　7.　風邪にかかりやすく、治りにくかったこと　15
　8.　副鼻腔炎などにかかり、トラブルや不快感が続いてきたこと　16
　9.　めまいや吐き気、頭痛に襲われることが多かったこと　18
　10.　ケガをしやすく、治りにくかったこと　19
　11.　胃腸が弱く、深刻な下痢になるなど、トラブルが多かったこと　20
　12.　歯のトラブルを抱えてきたこと　21
　13.　目が弱く、極端にまぶしさを感じるなど、トラブルを抱えてきたこと　22
　14.　心臓、腎臓、肝臓などにトラブルを抱えてきたこと　24
　15.　がんや良性腫瘍に見舞われてきたこと　25
　16.　脳梗塞と後遺症、また精神疾患を抱えてきたこと　26
　17.　「止まってしまう」症状について　27
　18.　これらの結果、どのような思いをしてきたか　28
　19.　そんな中でアンケートをして何がプラスだったか　29
　20.　病気・症状・体質の改善や、健康管理のためにしてきたこと　29

第Ⅲ章　この世の光を受けることのできなかった二世たち　31

付属資料　アンケート回答者別自由記述回答一覧　33

はじめに

アンケートにご回答いただいた皆様に感謝

京都「被爆二世・三世の会」の「被爆二世・三世健康調査アンケート結果報告書」をお届けします。

私たちはこの調査で、私たち被爆二世・三世の身体に起こっていることの把握を進め、原爆放射線による被害の真相、特に遺伝的影響の実相に少しでも近づくとともに、私たちの持つ漠然とした不安に対しても、より確かな答えを導き出し、私たち自身と子どもたち、孫たち、そして未来世代の健康を守ることにつなげることを目的としてきました。

アンケートの回答への協力依頼は、2020年4月から開始し、2023年にまで及びました。新型コロナウイルスの感染拡大と重なり、取り組みが難しい時期もありましたが、それらも経て、今日までに110人の方から回答をいただくことができました。

ご協力いただいたみなさまに、心から感謝申し上げる次第です。

京都「被爆二世・三世の会」内に、アンケートの集計と解析、報告書のためのチームを編成し、本報告書作成を手がけてまいりました。特に多数のみなさまから寄せられた自由記入の記述は、量的にも内容の深さにも圧倒されるものがありましたが、それらを徹底して読み込み、そこから被爆二世の実相が明らかになる努力を重ねてきました。

アンケートにご協力いただいたみなさまはもちろん、全国の被爆二世・三世のみなさん、さらには国内外のあらゆる核被害者のみなさん、そして心ある多くの人々にも本報告書が届くことを願うものです。

今回の私たちの調査は、何より広島・長崎の原爆放射線による被害の遺伝的影響を被ってきた人々の、より良いいのち・健康・くらしに資することを目的とするものです。さらに加えて、国内外の放射能被害に苦しむあらゆる人々のためにも、被爆・被曝による被害の真相、特に遺伝的影響の実相に近づくための一助となることを望みます。

2024年1月

京都「被爆二世・三世の会」

編著者　平信行・森川聖詩・守田敏也

編集委員　井坂博文・石角敏明・國府幸代・小林考企・庄田政江・平信行・森川聖詩・守田敏也・増田正昭・米重節男

京都「被爆二世・三世の会」の「被爆二世・三世健康調査アンケート」の概要

1、 調査期間

2020年4月～2023年8月

2、調査の方法

① 主として京都「被爆二世・三世の会」会員が自らのつながりで知り合いの二世・三世に回答の協力依頼をし、調査アンケートの手渡し、郵送等で回答記入をしていただきました。

② 一部、直接面談しながら、回答内容を聴き取り、筆記した例もあります。

③ 協力依頼は京都府下在住者が中心ではありますが、岡山「被爆2世・3世の会」、神奈川県原爆被災者の会二世・三世支部など、組織的に依頼した地域もあり、回答者は全国に広がりました。

3、回答者数と内訳

① 回答者総数は110人です。（2023年12月1日現在）

- うち被爆二世が102人、三世が8人です。
- 本報告書では報告対象を102人の被爆二世に限定し、三世は扱いませんでした。三世の回答者がまだ少ないため、いまの時点で報告書にまとめるには相応しくないと判断したからです。三世については今後の課題とします。

② 被爆二世の回答者の性別

- 男　41人　女　59人　性別不明　2人

③ 被爆二世の回答者の平均年齢と年齢分布

- 平均年齢　男　66．7歳、女　66．1歳、合計　66．3歳
- 年齢分布

50歳未満	3人
50歳代	18人
60歳～64歳	16人
65歳～69歳	22人
70歳～74歳	32人
74歳以上	9人

なお本報告書の完成以降も、調査を継続しています。「私もアンケートに回答したい」という方はぜひご連絡下さい。連絡先は本報告書の表紙に記してあります。

第Ⅰ章　回答データから見る被爆二世の姿

1. 健康障害を経験してこなかった人たちの割合

今回のアンケートでは、森川聖詩さん（神奈川県在住被爆二世）の半生の健康障害事例などをリストアップし、それらに該当する経験の有無を訊ねる方法で質問し、同時に実際に体験した健康障害の事実を、自由に記述していただく方法をとりました。その結果、いずれの方法、回答でも、健康障害と言えるほどの経験をほとんど経験してこなかった人が**32人（31.3%）**ありました。大きな病気や、重大な健康障害に見舞われることなく、健やかにの半生を歩まれてきた人々の割合です。

2. 森川聖詩さんの著書『核なき未来へ』から

森川聖詩さんの著された『核なき未来へ　被爆二世からのメッセージ』（2018年・現代書館）から、森川さんが半生において体験されてきた健康障害を抜粋、リストアップし、同じ体験をされた方にチェックしていただく質問をしました。

回答結果は以下の通りです。

- 生まれた時に体重が少なかった。　3人
- 幼少のころよく原因不明の発熱をした。　7人
- 幼少のころに何度も死線をさまよった。　3人
- 小学生の時、夏に暑さでいつも体調をくずし、ひたすら横になっていた。　11人
- 小学生の時に、夏にお腹を壊して下痢をしていた。　10人
- 物心ついたころから、常に何かしらの体調不良を感じていた。　6人
- 日々感じるたとえようのないだるさ、脱力感と疲れ易さに襲われた。　14人
- 風邪をひくと必ずといってよいほどこじれた。高熱や咳や痰。　12人
- 風邪をひくと急性気管支炎を併発した。　8人
- 距離感の目測を誤るなどで、転んだり、怪我をしたりすることが多かった。　5人
- 「交代性外斜視」だった。　1人
- 子どものころ、ケガをすると傷口がなかなか治らず、膿がたまり、炎症を起こした。　22人
- 指腱鞘炎、通称ばね指などになった。（小学校5年生～中学生）　7人
- 光に敏感で、まぶしく感じたり、目がくらむような感じがすることがあった。（高校生・受験勉強の頃）　8人
- まぶしさが昂じて、目や眉間から後頭部に鋭利なものを突き刺されるような感じがした。　2人
- 物心ついたころから今にいたるまで、腹痛に伴う下痢に悩まされ続けてきた。　21人

- 失禁してしまうこともあった。 4人
- 17歳で顔面痛発症、大学入学以降も悩まされ続けてきた。 4人
- 就職後、原因不明の症状に次々襲われた。 1人
- 突然のめまいに襲われた。 5人
- 目がかすんで焦点が合わなくなった。 5人
- 朝起きてから、ひどい鼻水がとまらなかった。 5人
- いくら手を洗っても、手が油を塗ったようにべたべたした。 3人
- クロレラによって症状が軽減した。 1人
- 顔面痛からメガネも負担を感じ、コンタクトレンズにしようとしたが痛みで無理だった。 1人
- 不整脈になった。 5人
- めまいや額などの脂汗になることがあった。 2人
- 腰痛になった。 4人
- 内痔核悪化。 1人
- 内痔核切除の手術を受けた。 1人
- パートナーないし自分が妊娠した子どもが生まれてこなかった。 6人
- 声が出なくなった。 1人
- 慢性咽頭炎になった。 2人
- 副鼻腔炎になった。 13人
- 後鼻漏に悩まされた。 5人
- 年齢が60歳を超えて、体調不良が増えた。 4人
- 花粉症になった。 6人
- 60歳を超えて花粉症になった。 6人
- 気管支喘息になった。 9人
- 3～10分前後もせき込むことあり。 5人
- 手足が急に冷えるようになった。 9人
- 心臓の鼓動がいきなり早くなり、脈が飛ぶような感覚。 1人
- 頻尿傾向、残尿感などでトイレに起きる。 6人
- 自律神経失調症と診断された。 3人
- 足底にしびれなどの違和感。 7人
- 椎間板ヘルニアになった。 8人

比較的多くの人が、森川さんと同じ体験をした健康障害にアンダーラインを記しました。

幼いころから虚弱で、疲れやすかったこと、しばしば体調を崩したことなど、多くの人が共通のことがらを体験しています。また、一旦風邪をひくと治りにくく、こじらせて、急性気管支炎にまで至る人も少なくありません。ケガをすると傷口がなかなか治りにくく、膿がたまり炎症を起こすこと、腹痛を伴う激しい下痢なども多くの人に共通する特徴です。

これらの症状は幼いころだけに限られたものではなく、成人した今日まで、重い悩みとして続いている深刻さがあります。

3. 被爆者への「健康管理手当」支給対象の11障害を経験した人たち

被爆者援護法に定められている「健康管理手当」は、次の11障害を伴う病気に罹患している被爆者に支給されています。この「11障害を伴う病気」に同じように罹患した経験の有無を尋ねました。

回答結果は以下の通りです。

- 造血機能障害　9人
  再生不良性貧血、血小板減少症、白血球減少症、鉄欠乏性貧血、その他の貧血症
- 肝臓機能障害　3人
  アルコール性、ウイルス性を除く慢性肝炎・肝硬変など
- 細胞増殖機能障害　13人
  すべての部位の悪性新生物（がん・白血病など）
  脳腫瘍だけは良性腫瘍でも認められる場合あり
- 内分泌腺機能障害　18人
  糖尿病、甲状腺機能低下症、甲状腺腫、甲状腺機能亢進症
- 脳血管障害　6人
  脳出血、くも膜下出血、脳梗塞など
- 循環器機能障害　9人
  高血圧性心疾患、慢性虚血性心疾患、心筋梗塞など
- 腎臓機能障害　6人
  慢性腎炎、ネフローゼ症候群など
- 水晶体混濁による視機能障害　17人
  先天性・糖尿病性を除く白内障のみ
- 呼吸器機能障害　0人
  肺気腫、肺繊維症、慢性間質性肺炎など
- 運動器機能障害　8人
  変形性関節症、変形性脊椎症、骨粗鬆症など
- 潰瘍による消化器機能障害　8人
  胃潰瘍、十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎など

呼吸器機能障害を除いて、すべての障害を伴う病気に被爆二世も罹患していることが分かります。特に、細胞増殖機能障害（がん、白血病など）、内分泌腺機能障害（糖尿病、甲状腺機能低下症など）、水晶体混濁による視機能障害（白内障）の罹患体験者が、際立って多いことが示されています。

第Ⅱ章　自由記述回答から明らかとなる被爆二世の姿　～　被爆二世の仲間たちに起こってきたこと

はじめに

今回のアンケートで私たちは、森川聖詩さんが著作に書かれたさまざまな体験や症状を列挙し、「同じような体験はありませんか」とお聞きしました。その結果、多くの方が似たような体験をしてきたことを、第Ⅰ章の2によって示しましたが、さらにたくさんの方がご自身の身体に起こったことを、森川さんに続いて赤裸々に書いて下さいました。この被爆二世の仲間たちの生の声を、ここにご紹介します。どのような身体症状を背負ってきたのか、特徴毎にまとめ、その具体例を、アンケートの中から拾い出しています。

ただしあらかじめお断りしたいのは、ここに書き出したのは、あくまで私たちのアンケートに記述されたことだけであり、被爆二世に起こっていることのすべてとは言えないということです。

理由の一つとして、このような調査が初めてであることがあります。私たちは参考にできる先行例がない中で、森川聖詩さんが書いて下さったリアルな実例を、記憶を辿るための糧として使わせて頂きました。そのため森川さんに起こっていない症状が、例として挙げられていません。とくに森川さんは男性ですから、女性特有の体験例が書かれていません。これは森川さん以外の女性の被爆二世の体験例が、いまだ世に出されていない中で、やむを得ざることでしたが、こうしたことにも、この調査は規定されています。

さらに大事な点は、調査が初めてであることは、ようやく私たち被爆二世が、自分の半生の振り返りに入ったところであることも意味しているということです。まだまだ調査そのものが進化の途上で、当然にも今後もっと、深まっていくものなのです。

実際に幾人かの仲間たちは、アンケートを書き終えた後に、他の仲間のアンケート結果に触れたり、それについて討論したりする中で、新たな事実を思い起こし、アンケートの書き直しを申し出たりしています。その中には自分の身に起こったことで、それまで被爆の遺伝的影響と結びつけて考えてはいなかったものの、新たに「あれも影響に違いない」と見えてきたこともあります。

そのことで回答は、森川さんの体験記を超える内容にもなっています。その顕著な例の一つが、歯をめぐる問題です。アンケートには「50代にして総入れ歯になった」など、「歯が弱く、次々と抜けていった」ことが多く書き込まれていました。

実はこれらのことは森川さんも経験されているのですが、本にはそれほど書かれておらず、そのため私たちのアンケートの問いかけ項目にも入っていませんでした。しかし回答に幾つもこの点が書き記され、そのことを後から知った仲間から、アンケートの書き直しが申し入れられ、付け足しがなされたりしました。

このようにこのアンケート事業は、まさにいま進化中のものであることをご理解下さい。その点でこのアンケートは、私たちが「被爆二世」とは何なのかを探りながら自覚し、アイデンティティを確立していくための産物ともなっています。

この点で、これを読まれている被爆二世のみなさんには、この報告書を読むとともに、

あなた自身がアンケートに参加されることが、あなたが被爆二世であることを前向きに受け入れ、アイデンティティを確立し、さまざまな被害を仲間とともに越えて、より良く生きることをつかみとる過程でもあることを、知っていただきたいです。その積極的なモメントこそ、私たちが打ち立てたい被爆二世としてのアイデンティティです。

以上の点を前置きさせていただいて、被爆二世の身に起こってきたことを詳述していきたいと思います。

以下、項目をご紹介します。

①体が弱く、疲れやすく、さまざまなトラブルに見舞われてきた
②疲れて寝ることが多かったこと、休んでいたことが多かったこと
③貧血が多く、倒れることが多かったこと
④足の痛みや関節痛に襲われること、骨折などが多かったこと
⑤特に夏や冬、季節の変わり目に弱かったこと
⑥冷え性、暑がり、多汗症だったりしたこと
⑦風邪にかかりやすく、治りにくかったこと
⑧副鼻腔炎などにかかり、トラブルや不快感が続いてきたこと
⑨めまいや吐き気、頭痛に、襲われることが多かったこと
⑩ケガをしやすく、治りにくかったこと
⑪胃腸が弱く、深刻な下痢になるなど、トラブルが多かったこと
⑫歯のトラブルを抱えてきたこと
⑬目が弱く、極端にまぶしさを感じるなど、トラブルを抱えてきたこと
⑭心臓、腎臓、肝臓などにトラブルを抱えてきたこと
⑮がんや良性腫瘍に見舞われてきたこと
⑯脳梗塞と後遺症、また精神疾患を抱えてきたこと
⑰「止まってしまう」症状について
⑱これらの結果、どのような思いをしてきたか
⑲そんな中でアンケートをして何がプラスだったか
⑳病気・症状・体質の改善や、健康管理のためにしてきたこと

なおこの章の以下のページでは、編著者の文を**太字・ゴシック体**で記し、アンケートの回答の自由筆記からの抜粋を、かっこをつけ、細字・明朝体で記しています。

また抜粋は可能な限り原文に従いましたが、文法上の誤りを訂正したり、分かりやすくするために要約したりもしています。文体も「である調」に、漢字も他の回答での使用と同じになるように統一しています。この点、ご了解願います。（回答文原文は巻末に列挙してあります）

1. 体が弱く、疲れやすく、さまざまなトラブルに見舞われてきた

まず多くの仲間が体験してきたことの概略を述べます。

総じて言えるのは身体が弱く、疲れやすく、ケガや風邪などに罹りやすかったことです。またそのケガも病も治りにくく、いろいろな困難に見舞われてきました。

より深刻なものとしては、心臓や肝臓、腎臓などに何らかのトラブルを抱えていたり、がんや良性腫瘍を患って来られた例もあります。

また親、兄弟姉妹にもさまざまなトラブルがあり、そもそも生まれて来なかった兄弟姉妹がいる場合もあります。そしてそれらがさまざまな形で家庭のあり方、幼少期の過ごし方にも影響を与えてきました。

もちろん約3割の方は、こうした体験をまったくしておらず、健康そのものでしたし、それぞれの方によって症状の強弱や発症年齢の違い、また味わったものが少数であったり多数であったりの違いもあります。

しかしたくさんの証言を並べていくと、さまざまな共通点が見えてきます。以下、具体例に入っていきます。

2. 疲れて寝ることが多かったこと、休んでいたことが多かったこと

例えばこんな記述があります。

「子どものころ、保育園に通ったのは半年くらい。残りは休んでいた」

「ほとんど幼稚園にも通わず、家で気管支炎のため弟（3歳下）と枕を並べて寝ていることが多かった。小学校3年生までは、すぐにしんどくなって保健室に通っていた」

「虚弱体質なのか食事が進まず、整体マッサージに連れられて行っていた。ソフトボールで肘を痛めて満足に投げられなくなり、その時も整体マッサージに通った。回復までに２～３年かかり、自然と諦めていた。懸垂は6年生の時のテストでは1回もできなかった」

「いまでもすごく寝る。８～９時間。 熟睡する。忙しくて睡眠を削るとたちまち倒れる」

「風邪ばかりで年中寝込み、疲れやすく、保健室にしょっちゅう行っていた。大人になっても同じ」

「小学生の頃は、外で走り回ると他の子より疲れやすく、横になって休むことが多かった。運動会や遠足の後は必ず寝ていた」

「中学、高校と学校から帰るなり、倒れ込むように寝ていた」

成人してからもこうした不調が続いている方が多いです。

「気分が悪くなく、まったく元気な時が一体自分にはあるのか、と思うほど不調が普通」

「思春期から成人して就職し、定年退職するまでの長きに亘り、悩まされてきた極度の疲れ易さがあった。人並みの体力がないために、原則3年毎の人事異動に伴う職場での長時間労働や、時に交通機関を乗り継いでの通勤などにより、病気をしたり、重症化して入院療養したりすることもあった」

「10代は大丈夫だったけれど、22歳から30歳ぐらいまで、とにかくだるい。しんどい。でもそれが普通だからと、大事と捉えてなかった」

「疲れるととにかく寝てしまう。それも気を失ったように寝る。1週間ぐらい寝ていることもある。根気が続かない」

また体力、筋力が弱かったため、運動が苦手だった方もいらっしゃいます。そもそも体調がすぐれず体育は見学ばかりだったという方も。

「体力、筋力、持久力が弱く、懸垂や逆上がりができない。走るのも苦手で体育は大嫌い。（さぼったことはない）」

「体育の授業で、時々ついていけないほど疲れた。体育会系の部活が続かず、幾つか部活を転々として、結局文科系の生花部に行き着いた。息切れはごく普通に、坂道や階段を上る時に感じていた。 それが普通だと思い込んでいた」

「小、中と体育を見学し続けた」

「小学5年生の夏前に、BCG予防接種の痕がふさがらず、一夏中プールに入れず、惨めな気持ちになった」

「小学校3、4年生の時、ひきつけを起こし、約十年間薬を飲んだ。小・中学校では体育は見学だけにしていた」

逆上がりができないという記述は他にもありました。指の付け根の関節が曲がらずにできなかったという例も。

こうした症状はストレスがたまると起きると言われている方もいらっしゃいました。

「ストレスがたまると胃腸炎や過呼吸もあったが、特に病院にも行かず、やり過ごしていた。不思議なくらい急に身体のバランスが崩れたり、体調が悪くなったりすることが年々増えている」

「18から20代後半にかけて体がだるく、胃が重く、嘔吐があった。とにかく体が動けず、会社を休んだことが1年に1回、必ずあった。周りから「妊娠しているのでは」と疑われた事もある。2日ぐらい体を休めると治り、元気になる。この症状は、また起こってきたと感じている」

「30代ぐらいから風邪で会社を休むようになった。土日の休養だけでは回復しない。体調がよければ何もなく、休日には普段の運動不足を解消する手段として、ランニングやスイミングに出かけたりしていたが、次第に疲れが残るようになってきた」

このような特有の疲れやすさ、「こんこんと眠ってしまう」ことなどは、広島や長崎では「原爆ぶらぶら病」と呼ばれました。それは被爆者の苦しみに理解のない、差別的な言い方でした。「あいつはいつもぶらぶらしてさぼってる。困ったやつだ」というニュアンスがこもっていたのです。

こうした症状を抱えた方は、原爆被害に特有なケロイドなどの身体症状や、見た目に分かる障害などが見当たらないため、「さぼりがち」と誤解され、理不尽なそしりを受けることもしばしばでした。

3. 貧血が多く、倒れることが多かったこと

このほか学校の朝礼の時に、長い時間、持たずに貧血で倒れた経験を持つ方が複数いらっしゃいます。

「朝礼などで長時間もたず倒れた。暑さ、直射日光、紫外線にとても弱く、頭痛と胸痛が起きる。熱中症にもなった」

「小学校の頃、朝礼で直立していると、気分が悪くなることが多かった」

「朝礼などで長い間立っていると腰、胃のあたりがしんどくて、とても辛かった」

「小学校～高校と、朝礼時に何度も貧血で倒れ、保健室に担ぎ込まれた。通学途中で倒れることもあり、何度か救急車で病院に運ばれた。特に高校通学時の満員電車では、途中でトイレに行きたくなることも重なり、電車に乗るのが恐怖。ひどいときは貧血に伴って吐くこともあり、全く意識がなくなり、気が付いたら病院にいたことも何度かあった」

「20歳くらいまでは、低色素性貧血、自律神経失調症などで常時通院」

4. 足の痛みや関節痛に襲われること、骨折などが多かったこと

小さい時に、歩くと足が痛く、辛くて「泣いていた」のです。

「通学で足が痛くなってしまったり、だるくなってしまったりで、泣いて過ごした」

「小学生の頃、運動をした日の夜は脚が異常にだるくて泣いていた」

「小学1年生の頃か、学校へ行く途中、足が痛くて歩けなくなった」

「小さな頃から関節痛がひどく、幼稚園の遠足などで少し長距離を歩くと、股関節から下が原因不明の痛みに襲われていた。歳を重ねてもそれは続き、現在も関節痛と縁が切れることはない」

「最近、街歩きに誘われて行った。その翌々日、右足が痛く、立ってもいられなくなった。少し立ち止まって、また歩いていたが、背骨の曲がりがひどいそう」

こうした痛みがいまも続いています。

「10～20代、関節炎（手足）で整形外科によく通っていたが原因不明。発熱することも多く、そういう体質だと思っていた」

「4～5歳の頃、家の中で遊んでいた時、転倒等のわずかな衝撃で右肩鎖骨骨折。20代以降、転倒、打撲など必ずしも激しい衝撃でないにも関わらず、左肩鎖骨骨折、右上腕骨骨折、手指骨折複数回等を経験。 骨折しやすい。手指、足の甲などの靭帯損傷を複数回経験」

「股関節脱臼で生まれてきた。足首の捻挫が多かった。バレーをやっていて、ひねっていた。10歳ぐらいまで。小さいからつまずくことが多かった」

「顔面痛で顔が痺れたことがあった。足にも激痛が走った。寝ている間に手にも。座っている時にもいきなり激痛がくる。本当に痛い。急に来る。肋間神経痛で痛い時には息もできない。中学1年生まで」

「50歳代の頃、たまたま測定した骨密度が低く、骨粗しょう症レベル。今まで肋骨骨折4回、膝蓋骨骨折1回を経験した」

5. 特に夏や冬、季節の変わり目に弱かったこと

同じ疲れでも特に夏が辛く、冬や梅雨、また季節の変わり目が辛かったという方、今も辛いという方も多いです。気温や湿度の変化など、周囲への変化への対応がしにくい。こうした傾向が、いまも続いている方もいらっしゃいます。

「夏場は毎日、吐き気・めまい・頭痛に悩まされ、雨の前は特に、首から上をはずしたくなる状態が続いた」

「夏は食欲が低下し、体重が減って（3～5kg）げっそりとなり、夏バテしやすかった。冬には体重は戻った」

「夏になると、不安、憂うつ、だるい、という高校時代だった」

「小学生の頃から、疲れやすいと感じていた。夏バテして食欲がなくなり、体重が減った。高校生の頃もそうだった。季節の変わり目には、口の周りに熱をもったできものヘルペスができて痛かった」

「夏と冬は子どもの頃から苦手で体があまり動かない。よく『気のせいだ』と言われたが、本当にしんどくて、自分を責めることがよくあった。低体温もよく起こし、吐き気が起こり、食べたものを全て吐いてしまう。きつい頭痛も起こる。貧血がきつく、鉄剤を注射してもらっていた」

「特に夏は自宅で窓から雲が動くのを見て暮らしていた。水泳の経験はほとんどない」

「夏も辛いが梅雨も辛い。人の何倍も疲れやすい」

「（中学で）バスケットボールクラブに入部し、屋外コートで活動したが、夏休みに入った途端、急激に疲れが出て起き上がれなくなり、一週間ほど寝込む。心底疲れた感じ。トイレに四つん這いで吐きに行った」

「夏は特に、運動後に嘔吐することが多い。夏の昼寝のあとに吐きやすい」

「夏の暑さ、日差しに弱いので、夏はよく身体を休めるようにしている」

「最近でも、体調不良で毎日の家事をするのが精一杯の時がある。前の年の8月は特にしんどく、1ヶ月に8回も注射、点滴、飲み薬と通院した。8月に生まれたのに、夏に弱い。父に似た体質」

「小学生の頃、特に夏は疲れやすく、すぐにグッタリしていた」

一方で冬が特に苦手だと言う方も。

「冬が苦手で100％嫌い。辛い。生きているのが嫌になる　冬は固まって動けない時がある。ずっとだるさをもっている。身体が重い。動きにくい。動く時に頑張らないといけない。年に数回、心身が疲れる。夜型で昼は弱く夜が強い」

「寒がり。血液検査で白血球がひっかかる。低め」

季節と言うより天候－雨の前がきつかったという方もおられます。

「雨の前の午後から、体、特に下半身の関節という関節がミシミシ、キシキシと痛み出し、耐えられない痛みで立てず。ひたすらひいひいと泣くしかない。何も食べられず、泣き疲れて眠る。丁度、透明人間がやってきて、痛いという関節を全部グリグリと雑巾搾りをす

るような痛み」
「気圧の変化に敏感で、天候が崩れるとだるさや頭痛が起きる。山で他の人より高度変化に弱い」
「冬場に暖房を強くし厚着をする。夏場の冷房で気分が悪くなり失神することも。温度変化で喘息発作が起き、冬場の冷えで嘔吐発作も起こす」
「関節という関節がミシミシ、キシキシと痛み、ひたすらひいひいと泣くしかない」というのはとても悲しい辛さですが、ともあれ全般的に、気温や気圧、湿度の上下の変化に弱い傾向があることが見えてきます。

「32歳頃、季節の変わり目などで風邪を繰り返して、昼休みに職場の近くの耳鼻咽喉科へ通う。咽頭が腫れて、痛みも伴い眠れず、喉元を保冷剤で冷やしたりしてしのいだ。（体温は平熱で局部が痛み、辛い症状となる）」
「気候の変わり目でめまい、頭痛が起きる。雨の降るのが分かる」
「小学5年の春頃から、曇天日雨天日に後頭部に周期的な頭痛を感じるようになり、9月に日赤病院でウイルス性髄膜炎と診断され、2週間入院した。脊髄の髄液中のウイルスが減少し、退院したが、特徴的な頭痛の後遺症は中学生になっても残り、母親がかかっていた鍼灸師に、三叉神経への針治療を受け、高校通学時に完治」

6. 冷え性、暑がり、多汗症だったりしたこと

身体が冷える、暑がる、かなり大量に汗をかくのも、よく報告されている特徴です。ただしこれらのすべてが起こっている方もいれば、このうちのどれかが起こっている方もいらっしゃいます。
「子どもの頃から手足が冷えやすい。ホットフラッシュがありがたい」
「小学3年頃から、冬が冷え性で、しもやけがひどくなった。高校生になっても、しもやけが足にできて、よく笑われた。低体温は現在まで。徐々に下がっているようで34℃の時もある」
「冷房や冷えにとても弱い。突然動けなくなることも」
「もともととても冷えに弱い。雨に打たれただけで体調がかなり悪くなる」
「常習下痢、嘔吐、手足の冷え、汗が出にくい、著しく寒がり、暑がりで根気が出ない、能率が悪い、作業意欲が湧かない、音に脅える、風に対する恐怖がある」
「小学生高学年まで、特に低学年まで、やたらと火照りがあり、顔が異常だった。小さい時から。汗は夏場でもあまり出ないので、冷え性。冬が苦手。著しく寒がり」
「幼少の時から冷え性で、蒸気機関車に乗ったり、急に暖かいところに行ったりすると、ほほが真っ赤になった。手足が冬場はしもやけで、毎年悩まされた。今でも年を取るにつれ、春秋がなく、冬の厚着から急に夏になるようにいつまでも厚着をし、人よりも多く着るので、スカートを履いたり、薄着になったりできないでいる。歳を重ねるごとにひどくなってきている」
「23歳の時、職場の冷房で体が冷えるようになった。60歳で退職するまで冷え性が続く。今は冷房の無い生活で症状は出ないが、冷房が効いている所では冷える」

一方で汗をよくかくこと、それも大量にかいたり、油っぽいべたべたした汗をかいたりし、それで身体が冷えてしまうことなども訴えられています。「衣服がびしょびしょになる」とか、「歩いた廊下がべとべとになる」などと報告されています。

広島出身の方で、本人に起こったことではありませんが、小学校の同級生の多くが被爆二世で、そのうちのある子があまりに足に汗をかくため、「学校側がサンダルでの登校を認めていた」という報告をして下さった方もいました。以下、報告です。

「野球をやっていて汗をたくさんかいたが、汗腺が人より多いと医師に言われた」
「痺れ、手足の静脈の怒張、浮腫が生じやすい。発汗過多。衣類がびしょびしょになる」
「急な大量の発汗、どうき、めまいなどがある」
「発汗が異常に多くなったのは中年になってから。48歳で子宮亜脱のため子宮摘出手術をしてからひどくなった」
「身体を動かしたり、食事をしたりする際、他の人より数倍程度、発汗する」
「私も子どもたちも汗の量が多くて、夏はいつも周りに驚かれる」
「背中に汗をすごくかく」
「手と足がべたべたで油っぽい汗をかく」
「足はいまでもストレスがかかるとベタベタになる。靴下が濡れてしまって逆に冷える。靴下の替えが必要」
「足がベタベタになるので、靴下が濡れて冷えてしまう。あと背中にだけすごく汗をかく。それはいまも治らない。毎日風呂に入っている。汗がかけないとかではない。背中だけ汗をかくので、Tシャツが濡れたりする」
「『あなたが廊下を歩くとベトベトになる』と言われる」
「手のひら・足の裏に汗疱（かんぽう）がよくでる」
「発汗過多」

7. 風邪にかかりやすく、治りにくかったこと

病気にかかりやすいと共に、治りにくかったのも大きな特徴です。とくに風邪をひいている期間が長いのです。1年のうちの大きな割合を風邪と過ごしてきた方もいらっしゃいます。

「風邪は季節の変わり目には必ずかかり、回復に多くの時間がかかる。なぜ自分だけ風邪をひくのかと思っていた」
「子どもの頃から、何か病気を発症するとこじらせてばかり。風邪をひくと咳だけが残り、ひどい時は2～3ヶ月も咳込んだ」
「39～40度の高熱が、幼児期～小学4年位まで1学期に1回は出て1週間近く学校を休んだ」
「風邪をひくとすぐに声が出なくなり、こじらせて長引き、学校を休むことが多かった」
「体が弱くよく風邪をひき、時には高熱を出して、ひきつけを起こしていた」
「毎年予防接種で発病していた。2日後か3日後。普通の風邪もよくひいていた。熱が

出るとペニシリンを打たれるのがたまらなかった」
「40代後半頃から、以前よりさらに風邪をひきやすくなり、それがエスカレートし、季節を問わず、1年のうち8～9ヶ月もの間、次々と風邪をひくようになった」
「風邪にかかりやすく、こじらせる。長く不調な状態が続くのが特徴」
「風邪をこじらせると熱が出て、喘息の発作のような息苦しさが続く」
「幼少時から今でもとにかく風邪をひくと厄介で、慢性気管支炎とぜん息になる。微熱が1週間以上続く」
「高校2年の時に、風邪をこじらせ、2ヶ月ほどクラブ活動ができなかった。体調がスッキリせず静脈注射（栄養剤）に通った」
「36歳の時、春先から風邪症状（指先のしびれが顕れたり）咽頭が腫れて白い膜で喉元を締め付けられる症状。喋ることが苦痛になり歩くことも出来なく、併せて右胸側部から息が抜ける症状があらわれて、近くの総合病院へ入院した。入院は十日間だったが、日中ほとんど点滴と睡眠を繰り返していた」
「インフルエンザの予防接種をするとすぐにかかった。クラスで流行る頃は元気だった」
「子どもの頃は、風邪を引くとすぐに喉がゼイゼイなり、喘息のような症状に陥っていた」
「31歳の時に海外研修団体旅行に2週間出かけたが、2日目から喉痛・風邪症状が現れて、ほうほうの体で帰国。出かける前から胃の調子がスッキリせず、風邪気味で薬を準備して行ったが苦痛だった」
「15歳、高校で病院通い。冬になると風邪。アリナミンの静脈注射でアナフィラキシーショックになった」

扁桃腺肥大で熱が出たと言う報告も多いです。
「小学生の頃はすぐ扁桃腺が化膿して白くなり、のどが痛かった。『扁桃腺の切除』を勧められたが受けなかった」
「幼少の頃から、気管支炎と扁桃腺肥大でよく発熱」
「子どもの頃から熱はよく出していた。扁桃腺炎や、肺炎により何度か発熱した。喘息気味で呼吸器が弱い」
「幼少期の頃、よく扁桃腺が腫れて高熱となり、ペニシリンの注射を打ってもらった」
「小学校低学年の頃までしょっちゅう発熱（原因は風邪だったり、扁桃腺炎だったり中耳炎だったり）していた記憶がある。小学校2年生あたりまでは月1ペースで学校を欠席していた」

8. 副鼻腔炎などにかかり、トラブルや不快感が続いてきたこと

前節の風邪の症状が、気管支炎や副鼻腔炎につながることも、とても多く報告されています。なお「蓄膿症」＝「副鼻腔炎」です。喉に鼻水が流れるなど、不快感が強く、これらに苦しんできた方から多くの報告が寄せられています。
それが鼻血や中耳炎などにつながったという報告も多くあります。ただし鼻血は風邪以外の場合でも出ていて、分類が難しくもあります。

「中高生の頃から頭痛気味であったが、40歳過ぎに病院で副鼻腔炎と診断され、手術を受けた。以降、頭痛が解消された」
「10代半ばまで蓄膿症だった。いつも鼻がつまり、鼻の奥から目にかけてつんとした痛みがあった」
「風邪をひくと、たいてい副鼻腔炎や気管支喘息に進む」
「蓄膿症で鼻呼吸ができず苦痛だった。大人になり大分よくなったが、風邪をひくと鼻の症状がひどくなり、耳鼻科で抗生物質や痛み止めを処方してもらった。中耳炎でたびたび鼓膜切開。扁桃腺がはれて発熱等、中学生前まで通院ばかりだった」
「十年程前と今年に、鼻柱部のピンポイントの激しい痛みを経験した。2回とも何の前触れもなく、徐々に痛みが強くなり、数分で激痛になった。痛み止めが効き治まった。耳鳴りも大人になってから頻発している」
「小・中・高時代は、鼻水が出ていた。現在は、鼻水は喉の方に流れて鼻から出ない。そうなると何度つばをのみこんでも。いつも喉ぐちに何かある様な感じがする」
「冬の夜など喉が狭くなった様で、唾液も通りにくく感じせき込むことが多い。喉ぐちが痛くなることも多い。後鼻漏ではないか。現在も続いている」
「父をはじめ家族そろって耳鼻が悪く、風邪をひくとすぐ中耳炎になる。また、副鼻腔炎にも、毎年何回も悩まされる」
「副鼻腔炎で味覚臭覚が全くなくなり、たびたび薬を使用して治ったりの繰り返し」
「副鼻腔炎がここ数年悪化し、時に発熱あり。扁桃腺炎も繰り返し」
「鼻の粘膜が炎症を起こす、これと言うアレルゲンが見つからない。 鼻腔の炎症が慢性化している」
「私と父は鼻炎だった。朝起きるとブーンと鼻をかむ。でも私は食べ物を替えてから治った」
「風邪をひくと、だいたいこじれ、副鼻腔炎を併発し、鼻から黄色の膿が排出されるなどした」
「幼少期アレルギー性副鼻腔炎、蓄膿症。50代、蓄膿による味覚障害約十年、漢方薬で改善」

たびたび、たくさんの鼻血が出たことも報告されています。

「鼻血はしょっちゅう出ていた。どっとでる。勉強している時など。高校までよく出た。慢性副鼻腔炎ということで高校2～3年の春休みに手術。それ以降は出なくなった」
「中学の時、突然鼻血が大量に出る時期があり、外に出かけられない時もあった」
「鼻血が止まらなかったのは中学時代。毎朝1～2時間ほど、洗面器が真っ赤になるほど出血。高校入学前に鼻の血管を焼き切って止まった」
「鼻血は、物心ついた頃から日常茶飯事。貧血で低血圧。貧血が治ったのは妊娠時に増血剤を服用してから。血圧は今も低い。最高血圧85～95程度」
「鼻血が出たら止まらなくなって、難儀した思い出が恐かった。鼻血だけでなく、出血するとなかなか止まらないので、ケガをしないようにしなければならなかった」
「幼少期は鼻血がとても出やすい体質だった」

9. めまいや吐き気、頭痛に襲われることが多かったこと

めまいを起こして頭がクラクラする経験、またそれとつながる形で吐き気に襲われる経験、また頭痛に悩まされることも多くの方が経験しています。

「高校生くらいから、ふらふらし吐き気がした。40歳前に病院で起立性低血圧が原因と分かり、治療してから少しましになった」

「ほんの一瞬、視界が歪む。『昔のブラウン管テレビの電圧が一瞬下がって消えかかる時の様な現象』という例えが、理解してもらえるかも分からない。腹痛と耳鳴りは、頻発しているが生活出来ない程ではない」

「40歳ぐらいで亜急性甲状腺炎になり、半年ほど仕事も休み休みに。自律神経失調症でめまいがひどく、1ヶ月ほど仕事ができなかったことも」

「めまい、頭痛、立ち眩みが常にひどい。子どもの時から現在も」

「暗幕のひかれた暗い中で映画を観ると、めまいがし、ひどく気分が悪くなり、嘔吐症状もあった。このため学校での映画鑑賞会の時は、一人で校庭で遊んでいた」

「貸し切りバスなどの乗り物酔いがひどく、とても気分が悪くなり、必ず嘔吐していた。バス旅行などの際は、事前に酔い止め薬を飲み、万全の準備をして参加していた」

「30代の時、寝不足が続き、めまいで起きられなくなった。天井がグルグル回り、歩くと嘔吐するので、トイレまで這って行った。40代で勤務中、急にめまいがして平衡感覚がなくなって仕事も2日休んだ。その後も2度めまいが起こったが、整体などで癒して自然に治った。しかしストレスからか不整脈に」

「子どもの時から車酔いがひどく、バス・電車・船すべてダメだった。不安をかかえて参加した高校の修学旅行は、酔い止めの薬を飲みすぎ、どの写真を見ても全く記憶にない」

「過労気味のときに、回転性めまい、脳ヘルペスなどで受診、投薬を受けたことがある」

「時々見えるものすべてが白っぽくなることがあり、しばらくすると元に戻る。子どもの頃には頻繁にあったが、40歳の頃から気にならなくなった」

「この2～3年、耳鳴りと時々起こるめまいに悩まされている」

「中学2年位から偏頭痛に悩まされて、今でもたまに痛む」

「常習的な頭痛があるため受診し、偏頭痛と緊張型頭痛と診断された」

「成人してからも吐くことが多く、血圧と関連している。もともとの血圧も低く（上 90、下60）、さらに下がると嘔吐しやすい。夏は特に運動後に嘔吐することが多い。夏の昼寝のあとに吐きやすい。ケガをしたとき、指先から血を出すと血圧が下がり、嘔吐」

「腹痛、下痢はなし。そこにいくまでに吐いていたからか、口内炎がすごくできる子だった。30代ぐらいまでは口内炎がよくできた。小さい時はちょっと調子を崩すと2、3個できて、それがつながったりした。車酔いがすごい。血液の量が少ないのではと漢方医に言われたことがある」

「子どもの頃、車酔いがひどく、乗ったとたんに吐き気を催すことが多かった」

「幼少の頃はよく吐いていた。熱をよく出し、病院が友達の時期があった」

「仕事中に突然頭の中が真っ白になり、何をしているのかと不思議に思った。また、体調の不良がしばらく続き、その過程で右の耳に異変を感じたら、鼓膜に穴が空いていた。咽喉や鼻が丈夫になることはない」

「子どもの頃（小学生くらい）、よく吐いた。乗り物酔いもひどかった。夏でもプールに入ったりすると、じんましんが出る。足が冷える。日射で頭痛が起こり、吐き気を生ずる」
「小学生の頃、特に夏、ずっと頭が痛かった、痛くないという状態がどんなのか分からないくらい」

10. ケガをしやすく、治りにくかったこと

ケガが治りにくいこと、膿んだ状態が長く続くこともたくさん報告されています。
「蚊に刺されると異常に腫れあがる」
「小学低学年の頃、夏、蚊に刺されると膿んで、薬をつけてガーゼ、バンソウコウで手当てしていた。自分でも出来ていたと思う。よく転んでひざは傷だらけで、祖母が家の前の砂利を除けていた」
「ケガをすると膿んでしまう。化膿してなかなか治らない。カサブタができてもその下がグチュグチュ」
「傷跡が化膿し、ケロイド状になりやすい。子どもの頃、そして成人して以降も、たびたび足に赤紫の斑点が出たり消えたりした」
「ケガをしても、虫に刺されても、腫れて化膿したり、水ぶくれができたりして治りが悪い」
「子どもの頃、傷口が化膿しやすかった。傷をすると治りにくく、白い膿がたまることが多かった。ガラスで切った痕がケロイド状になった」「やけどやしもやけはグジュグジュが続き、なかなか治らない。蚊に刺された痕は冬まで残り、よく『なんでそんなに痕が残るの？』と聞かれる。他の人は残らないのかと不思議に思っていた」

そんな中で母親を傷つけてしまったのではと悩み続けてこられた方もいます。
「小学生の頃、傷がもとで化膿し、熱を出した。夕食後、膿を出してもらうのが嫌で、『こんな体質になった子を産んで』と母親を憎み、口走ったこともあった。（謝ろうとしてもその親はいない）」

一方でこうした症状が、また起こりだしていると言う方も。
「子どもの頃の症状がまた起こっている。油が飛んで火傷すると傷になって痛い。1ヶ月くらいグジュグジュしている。傷口の皮膚の再生力が衰えている」

このように傷が治りにくいため、夏に蚊に刺されることを警戒している方もいます。ついつい掻き壊してしまったりすると、膿んでしまい、長く傷跡が残るからです。
「20歳の頃に足首の靭帯を切ったことで手術をした。1ヶ月後にギブスを外すと、足の皮膚が腐っていて骨が見えていた。その後、治療を続け、2年後に汚いながらも傷口がふさがった」
「虫にさされた時に、しばしば傷口が膿む。子どもの頃から起こっており、治りにくい体質は今も続く」
「中学時代に皮膚病が何ヶ月も治らなくて困った。高校時代に帯状疱疹が治らなくて困

った」
「ケガをして傷が治りにくいことは、子どもの時からずっとだった。今は感じない。ケガを滅多にしなくなった事もあるが、体を少し物にぶつけただけでも、青く内出血していた」
「引っかき傷や擦り傷を放置していると化膿し、現在もその状態が続いている。盲腸の術後、糸が吸収されず、化膿して半年後に再手術を受けた」
「ケガをすると、傷跡が必ずケロイドのようなアザになって残る」
「転んで膝など擦りむくと、必ず化膿して外科を受診していた」

11. 胃腸が弱く、深刻な下痢になるなど、トラブルが多かったこと

胃腸が弱い方が多いのも特徴です。学校帰りに突然、下痢が始まり、トイレが間に合わずに失禁してしまったことなど、悲しい思い出を持っておられる方も。またこうした傾向が成人してからも続き、いまなお不調を訴える方も多いです。

「幼い頃から腹痛と下痢があり、今も続いている」
「腹痛や下痢は、大人になってからの方が顕著で、水割りの氷や火の通りが甘い肉類などでひどい腹痛を起こし、下痢するが、排泄すると治まる」
「よく腹を壊し、下痢はしょっちゅうだった。パンツが汚れる時もあり困った」
「子どもの頃、便秘に悩まされたが、食生活を変えたら改善。しかし時々下痢をする」
「高校生の時から胃が弱く、胃潰瘍は何度も経験している」
「自律神経失調症で、年に数回ひどい腹痛がある」
「小さい頃から、下痢と激しい腹痛に悩まされた」
「56歳まで症状は続いたが、数年前に激しい下痢と嘔吐を繰り返し、その後、受診したら宿便があり、便を柔らかくする薬を服用しだして、やっと治まってきた。大腸カメラでは虚血性腸炎の跡もあった。大腸に良性ポリープも」
「未熟児（編者注：現在は**低出生体重児**と呼ぶ）として誕生。 すぐにお腹を壊すため、子どもの時には、刺身などの生ものは一切食べさせなかったとのこと。大人になっても、刺身を美味しいと感じることはない」
「小さい頃から胃腸が弱く、下痢と腹痛に悩まされ、トイレの回数も多かった。この状況は現在も続き、長時間の仕事は建物内（すぐにトイレに行ける）、長時間移動はトイレ付車両（東海道線など）が望ましく、出張や旅行は不安であった」
「慢性的な便秘。コロコロするウンチ。『おむつを替えることがほとんどなかった』と母が言っていた。玄米を食べるようになってから治った。玄米を食べないとすぐにコロコロになり、つまりやすい。21歳のときに急性腸炎で入院。急にお腹が痛くなって、救急車で運ばれた。薬を飲まされても治らない。大きい病院に行ったら即入院。腸壁が全部出血。トイレにいったら明るい鮮血が出た」
「お腹が弱く、しょっちゅう下痢に悩まされてた。生まれた時に先天性食道閉鎖症という病気を持っていた。食道と胃が繋がっておらず、途中でふさがっている状態だった。生後2週間で手術」
「体力作りをしていたが胃が弱く、下痢が多く、また貧血で全校集会等ではよく倒れた」

「小中学生の時は下痢しやすかった」
「いつも胃の調子が悪く、体力がなく便秘気味であった。人よりも給食を食べる量が少なく、たくさん食べれず、幼稚園の時、泣いた記憶が鮮明にある」
「小学校3年、4年腸カタルに。給食を食べられなかった。微熱・頭痛・胃の痛み・手足の痛み・めまい・吐き気に悩まされた。食べ物を吐いてしまう。腸カタルは腸の粘膜にふきでものができて消化がうまくできない」
「未就学児の時は、しょっちゅう腹痛を起こし、小児科で診断され、ペニシリン注射の治療を受けていた」
「幼稚園　～小学校の頃、食が細く（食欲がなく）、食事に長い時間要していた。（1～2時間／回）。給食は食べきれないことが多く、いつもパンは残して持って帰った」

こんな経験をお持ちの方もおられます。
「小学高学年の頃から急性の下痢があらわれるようになった。（原因は両親の口喧嘩）父親の体調が優れず、農作業を休みがちで、母親がヒステリックになり金切り声で詰めることがままあり、その声を聞いた途端に急激に便意を催し、便所に駆け込んでいた」

下痢のきっかけがお父さまに対するお母さまの「ヒステリックな金切り声」というのも二重三重の被害です。お父さまは恐らく「原爆ぶらぶら病」と言われた症状をお持ちだったのではないでしょうか。このように継続的に働けず、生活苦に陥いる方が絶えなかったのですが、その生活苦がお母さまの「金切り声」の原因となっていたと推察されます。それが下痢を誘発されていた・・・悲しい体験です。

命の危機に陥った方もおられます。
「50歳の時、腸閉そくで1．5m 腸を切除。救急車で運ばれ、遅れたら死んでいた」
「60歳突然腹痛が起こり、激しい痛みで下痢、嘔吐、夜間救急で診察を受ける。即、緊急手術となる。腸閉塞、原因不明とのこと。もう少し遅れると危ないところだった」

胃腸関連では「鼠径ヘルニアの手術を受けた」という報告も幾つかなされています。
「小学校6年生の時、鼠径ヘルニアの手術を受けた。65歳になって2度目の鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術を受けた」
「手術後、 尿用のカテーテルを本来ならば翌日外す予定であったが、大変苦しくて我慢できず、無理を言って当日夕方外してもらった。また、退院してからも時々下腹部の強い痛みが残っている」

12. 歯のトラブルを抱えてきたこと

歯の弱さも多くの方がかかえてきました。50代後半で総入れ歯という方もおられます。また歯が生えるのが遅かったり、神経が飛び出したため、抜歯したりといった経験の報告もなされました。

「51歳頃から、歯が抜け始め、最初は部分入れ歯で対応。56歳の頃、抜ける歯が増え始め、最終的に全歯を抜歯、総入れ歯を余儀なくされた」
「歯が生えるのが遅く、食べるのが遅かった。口の中が小さく奥歯の永久歯が2本欠損」
「歯はとても弱い。奥歯が自然に縦に割れてしまい、やむなく抜いた」
「親知らずは、19～21歳で下左右両方が生えかかり抜歯。上右は50歳代で向かって生え出したので抜歯。上左はまだ残っている」
「40歳代後半から奥歯が傷みだし、歯科医は歯槽膿漏だと言って次々と抜歯。結果、奥歯は4本とも無くなった」
「21歳頃に知覚過敏症となり、下中央の前歯2本の神経を取った」
「両方の下あごの犬歯から神経が飛び出ていた。その先にエナメル質が被っていたが、それが削れてやがて激痛に。治療した」
「右の下の奥歯がない。その上の歯を削った」
「頻繁に口内炎、歯肉炎等、口腔内の発症傾向。歯茎も出血しやすい。歯茎用歯磨きを使い、 ポイント歯ブラシによりマッサージを行うことで軽快に努めている」
「歯は子どもの頃に、エナメル質が全然ないと言われ、ボロボロ」
「30代に歯科大学に通いづめ。歯根炎を起こし、骨膜炎の一歩手前までいった。抜歯の本数多い」

ちなみに私たちがアンケートを作成する際、歯については関心の外にあり、質問項目に入れることができませんでした。ところが歯に関する報告もそこそこあり、被爆二世の中に、歯が弱い方がおられることが分かりました。
この点をアンケート項目の中に入れていたら、もっとたくさんの報告がなされたのかも知れません。この点はアンケートのリニューアル時にしっかりと入れ込みます。

13. 目が弱く、極端にまぶしさを感じるなど、トラブルを抱えてきたこと

目について、視力が低い場合もありますが、周りの誰もが気にしてないのにまぶしさを強く感じること、しかも強烈なインパクトを持って、光が目に飛び込んで来ること、それらから目が辛いと言った報告も数多く寄せられました。

「30歳過ぎた頃から、太陽の光がまぶしく感じることがよくあった。現在も太陽の光は強過ぎ、目が開けられないくらい辛いことがある。濃い目のサングラスを使用している」
「高校生の頃、近視のメガネを授業中かけていた。ずっと後、40代の頃、ひどい乱視といわれ、ずっとメガネを掛けていた」
「中3の高校受験で、勉強らしきことをするが、右眼に異変を感じて眼科を受診した。視野が随分と狭くなっていると診断された」
「大人になって斜視と言われた。子どもの頃は気がついていなかった。野球部の時に目測がずれて、ボールをボロボロ落とした。外野フライの時にうっかり目をつぶると取れた。見ていると落とす」
「目をつむると光が走る。いまもそう。星が目の周りに出たり、光が走ったりする」

「狭隅角眼、左網膜委縮が判明。64歳」
「小学生から中学生の時、しばしば霰粒腫（さんりゅうしゅ）になった。大人になってから手術もした」
「視力は良かったが、40歳代で老眼になった。また、左目が乱視と判明した」
「46歳で翼状片（よくじょうへん）という紫外線による目の病気になり、右眼の手術を受けた。同じ保育士でこの病気になった人は周りにいない。10年後に、また手術が必要となった」
「目は片方の視神経が逆についており（乳頭逆位）、白内障もあり視力低下や視野狭窄があり点眼薬を続けている」
「まぶしがり。クラス写真を撮ると一人だけまぶしがった顔をしていた。写真でいつも一人、顔をしかめている。外でのフラッシュの無い写真でも」
「閃輝暗点（せんきあんてん）という、片頭痛の症状があり。視界の一点から光の裂目が広がり、全体にひろがって、立っていられなくなる時もある。頻度はまちまちで、月に2～3回くらい」
「いまでもよくぶつかったり、手に何かを持ったら落としたりする。機能がずれている感じ。距離感を間違える。小さい頃からずっとある。お父さんに怒られた。転ぶまではいかないが若干ズレている。何かを持った時にミスる。むっちゃ怒られた。『わたし、ちゃんとやってんだけどな』と思ってた。父が理不尽に怒る人でよく怒られていた」
「小学生頃によく霰粒腫ができた」
「60歳前から、血圧が高くなった。それまでは普通だった。目のピントが合わなくなり、プリズム入りの眼鏡にした。近視・乱視は中学生の頃から。ここ3年くらいどんどん見えにくくなり、プリズムもこれ以上入れられないところまできているので困っている。右目の筋肉が縮んでいると、眼科で言われた」

「小学校2年の頃、視力の弱いこと（両眼共0．2程度）がわかり、弱視と診断され、分厚い眼鏡を使用。当時は眼鏡使用の小学生は少なく、あだ名は『メガネザル』」
「その後も近視は進み、小学校6年の時は両眼共0．1以下になり、ハードコンタクトレンズに切り替えた。その後52年間、ハードコンタクトレンズを使用」
「50歳代の頃から定期健康診断の度、眼科の指摘あり。強度近視の為、網膜剥離や緑内障、白内障等の疾患が発生する可能性が高いので、定期的に眼科に通院」
「60歳の時、眼科で左眼の網膜裂孔と診断され、網膜光凝固術を受ける。この頃から白内障の症状が顕著になり、視界に影響が出始める」
「63歳の時には、白内障の症状で通常生活に影響が出るような状況なので、両眼白内障の手術を受けた。その時、多焦点レンズにして眼鏡の不使用を希望したが、強度近視の為、多焦点レンズは安定しにくいとのことで、単焦点レンズを勧められ、メガネを併用」
「ほとんどの白内障手術は日帰りで行われているが、強度近視なので異常事態の発生の可能性が高いとのことで、念の為3泊4日の入院をし、両眼の手術を行った。実際に手術当日の夜中、角膜に強い痛みが発生し、緊急で深夜に診察していただき、痛みが治まった。日帰りだったら救急車の世話になっていた」

14. 心臓、腎臓、肝臓などにトラブルを抱えてきたこと

心臓にトラブルを抱えて来られた方も多くいらっしゃいます。このため子どもの頃に運動を制限されていた方も。またトラブルの中でも、僧帽弁の弁膜症が多く、治すために僧帽弁形成術を受けたり、人工弁への取り換え術を受けたりされた方もおられます。

「心臓が悪く校内マラソン大会に一度も出られなかった」
「幼少期、『心臓弁膜症だから、激しい運動はしてはいけない』と言われていた」
「60代後半で、心臓僧帽弁膜閉鎖症が判明。年に一度検査」
「心臓の弁に軽い奇形」
「いつもだるく、時々発熱。三男が1歳になった頃、心臓が悪いと言われた。25年後（54歳）、いよいよ来るべき時が来たと思った。緊急入院で弁置換術を受けた」
「病名は高血圧、糖尿、脳梗塞、腎臓梗塞、血腫、甲状腺腫、胸腺腫、重症筋無力症、緑内障、加齢黄斑変症、眼瞼下垂、脊柱管狭窄症」
「58歳頃、時々心臓がバクバクするようになり検査を受けたが、心電図に異常がないので、原因が分からなかった。循環器科の医師から『先天的な血管の異常があったのかもしれない』と言われた。とにかく心臓の異常を感じたら、すぐ心電図を撮るように言われていたので、病院に駆け込んだところ、即入院となった。急性心房細動だった」
「心臓の位置異常があり、坂道は息切れするが、平地は歩いても大丈夫。今のところ治療の必要ないとのこと」
「出生時体重1900g。先天性の心臓弁膜症で、不整脈、貧血・どうき、息切れがずっとあった。54歳で僧帽弁が千切れ、呼吸ができなくなり救急搬送。一時、心停止。弁の手術により生還。62歳の時、その時に縫い合わせた弁が不調となり、人工弁に替えるため、2回目の開胸入術。成功したのだが、心房調動が残り、どうき・息切れ、不整脈・（頻脈）に今も悩まされている」
「50歳で微小血管狭心症に。冠攣（冠攣縮性狭心症のこと）。咳がのどの奥からこみ上げてくる」
「5歳の時、風邪のため診察を受け、心音に異常が見つかる。精密検査の結果、心臓の壁に穴があいていることが判明。病名：心臓壁欠損症（心臓の壁に直径1センチの穴が3個）。当時の医療では手術不可ということで『この子は20歳までは生きられない』との診断がされる。
5年後、『超低体温手術を受けてみては』という薦めがあり、10歳の時、手術を受ける。その後、経過良好で遠足にも行けるし、体育の授業も受けることが出来だす。駆け足も、水泳も、野球も、今まで禁止されていた運動全てができるようになった。毎冬のひどいしもやけやひび割れ、胸の痛み、発作から解放される。厳しいカテーテル検査からも解放される。その後、20歳になるまでこれといった病気はしていない」

心臓のトラブル以外では、盲腸の手術を受けたことや、腎臓結石を患ったことなども報告されています。

「小学生で盲腸の手術。中学生で部活動の疲れで腎臓炎、数日の入院。大学生で尿管結石で1ヶ月入院。

その後、腎臓に絶えず結石を持ち、その後も何回か尿管を通して排出。7年前には結石が動かず入院しては再手術した。40歳代に2回、痛風に罹り、しばらく薬治療。10年前から血糖値が上がり、糖尿病と診断された」

「小学低学年、高校生の頃、腎炎と診断されたが、自然に治まった。症状は、顔面がむくむ、尿に蛋白が出る、身が疲れやすい。遠足や運動会の後は必ず横になって寝ていた。塩分制限水分をしっかり摂るよう指導され、夏はスイカをよく食べさせてくれた。夏は食欲が低下し、体重が減って（3～5kg）げっそりとなり、夏バテしやすかったが、冬は体重が戻った。その後は尿蛋白（―）。体力が弱いと、小学生の頃より感じていた」

「30歳の頃突然血尿があり、検査の結果尿路結石と診断され、その後、何度も結石による痛みが発生して苦んだ。その結石が排出されても、次の結石が現れて、痛みを繰り返した」

肝機能の障害も多く報告されています。

「学生の時と、新卒の時、肝機能障害を発症して1ヶ月余り入院。点滴治療をした。現在もその名残りで、B型肝炎のキャリア」

「23歳の10月に職場で倒れた、尿管結石。救急車で運ばれた。そうしたら肝臓の数値が悪くなっていた。顔が真っ黄色になっていた。劇症肝炎を起こしていた。最大数値900。石はすぐに出た」

「胆嚢炎（胆石症）を発症して、胆嚢切除手術を受けた」

「生後、黄疸が消えず、胆道狭窄と診断され、通院を繰り返していた。医者からは、小学校入学まで生存するのも難しいと思われていた」

「小学校4年のとき、肋膜炎、肝炎で療養、学校を休学する」

15. がんや良性腫瘍に見舞われてきたこと

がんや良性腫瘍に見舞われた経験も多く報告されました。

「68歳、11月に人間ドッグの胃カメラ検査で胃癌を発見。12月19日に全摘手術」

「48歳で乳がんになった」

「2008年に突然声が出なくなり、精密検査を受けると甲状腺がんが見つかった。2008年に手術を受けて、翌年に再発。2009年にも手術。2015年にまた再発。3度目の手術を受けた。同年手術で取りきれていないがんのため、アイソトープ治療を受けた。 現在も定期的に検査を受けている」

「44歳の時、子宮筋腫で腹痛がひどかったが、何もしてもらえなかった。半年ほどの我慢の末に自宅で痛みに倒れ、5日後には手術をしてやっと痛みの原因が分かった。筋腫が医者たちの思っていた子宮の外に着いたこぶ状ではなく、子宮の壁内部にできており、卵巣の周りに、腹膜が癒着していたことで痛みがあった。

術後4日目で、原因不明の動脈破裂を腹内で発症し、2週間の入院生活に。お腹全体

が紫色に大きく腫れていて、死ぬのかと思った」
「現在甲状腺に腫瘍があり、年々少しずつ大きくなりつつある」
「64歳、前立腺がんの疑いで経過観察後、翌年がんと確定した。化学療法で治療したが、69歳前立腺摘出手術を受けた」
「53歳、がんが4ヶ所発生（肝臓、腸、前立腺、胃）。中医（中国伝統医学）の診たて。いずれもステージ1未満。ただし肝臓はステージ1に該当していた。徹底した食事療法などで半年から1年かけてほぼ良くなった。その後も胸に良性腫瘍があり、ストレスが強くなると大きくなりだすが、対応をすることで良い状態に戻すことを繰り返している」
「甲状腺腫病」
「小学校低学年の頃、白血球減少症。同じ頃、心臓に雑音、小・中・高と校内マラソンの前の健康診断で引っかかり、マラソン大会には出たことがない」

16. 脳梗塞と後遺症、また精神疾患を抱えてきたこと

脳梗塞、そしてその後遺症としてのうつの報告もありました。また父親の精神に関する障害の報告もありました。

「脳梗塞により精神病院に3ヶ月入院。後遺症でうつに。朝に酒を飲まないといられない。夕方になると手に震えがきていたが、アル中は自分で克服」
「職場で倒れた。血圧を測ったら下が200までいって測定不能だった。再度の脳梗塞の疑いで2週間入院。その後、役場の仕事がきつくなり、34歳前の夏にまた倒れた。お酒を飲まないといられない状態。3本くらい飲まないといけない。アル中に。労災」
「50歳、うつ病、今も続いている。脳梗塞になってから」
「58歳、脳梗塞。呂律が回らなくなり、すぐに入院。点滴で血栓を溶かす。1日で良くなる。翌日には呂律が回らない状態が消えた。5日間入院。その後も脳梗塞を繰り返している。61歳、度々眼底出血」
「64歳脳梗塞。1ヶ月間入院し、3ヶ月ぐらいで目が正常に動くようになった。バランス感覚は4年経って元通りなってきた、しびれは残る。65歳再発、1年ぐらい治療」

「46歳で脳内出血。静脈が切れたが自然とバイパスができたので医師が驚いていた。点滴の治療。何も障害も出なかった。数年に1回CTを撮っている。その時の血液の精密検査で貧血と子宮筋腫が分かり治療した」
「ストレスの自傷なのか、耳をかき過ぎ傷つけてしまう。カサブタをとってしまう。それでいつもグジュグジュしていた。小学校の中頃から中学校まであった。ストレスで爪を剥がすこともあった」

この他、親からの精神的なDVを受けてきたことの報告などもいくつかありました。その場合、親が何らかの精神的障害を負っていると思われるのが特徴です。
ちなみに私たちのアンケートではこの点も質問項目に入っていません。そのため「精神の障害についても聞いて欲しい」という回答も寄せられました。

この点は多くの場合、本人自身の問題としての回答は集まりにくく、被爆している親、親せき、兄弟姉妹の傾向としてあるので、本人に起こったことを集めているこの報告の中からは、抜け落ちがちです。
しかし、そうした近親者と接する中で、DVを受けたり、近親者のうつ症状やうつ自殺に遭遇するなど、さまざまな辛さ、被爆による深い被害が顔をのぞかせています。次回アンケートではこれらの実態もつかめるように工夫します。

17.「止まってしまう」症状について

被爆二世・三世110人からのアンケートの中で、二世一人、三世一人が「急に止まってしまう」という、特異な症状を報告して下さいました。
この症状については、かつて被爆医師肥田舜太郎先生が詳しくお話されたことがあり、そのことを説明して「被爆者に起こってきた症状ですよ」と伝えたところ、二人とも「自分だけに起こっていることでないことが分かって勇気づけられた」「初めて自分の苦しみが承認されたようで嬉しい」と声を返して来られました。
この点を踏まえた上で、この報告も書き添えます。

「働きにくく動けなくなるときがある。スイッチが切れる、まさに『ぶらぶら病』などで言わる通り。友だちと話していて止まった感じ。記憶がなくなる。変わった人と思われたり、心配される」
「体が動かなくなったことは、40歳過ぎてから父に話した。その当時は言えなったが、『動かなくなる』とは言ったことがあった気がする。アンケート回答の間にも父と話したが、父も似た症状があり『遺伝かもしれない』との話になった。
どんな感じかと言うと、短距離走で『よーいどん』でスタートできない。『よーい』で固まって動けなくなる。『ゆた(琉球列島の言葉で、職業的な占い者のこと)に見てもらおうか』と友達に言われて傷ついた。通知簿に担任が『起立性調節障害』と書いていた」
「動かなくなる症例など、あまり人に言えない。人に言えるようになったのは40歳過ぎ。それが二世に色々とあると聞いて勇気が出た。私だけではないということで、安心、発見があった。心強いと思った」
「ご飯を自分で作るようになった。加工食品をあまり食べなくなった。出汁も取るようになったら、体調が楽になった」
「小学校のときの目のチカチカについて、病院で色々と調べられたが、『特に悪いところはない』と言われることが多かった。こっちはめっちゃしんどいけれど、『偏頭痛かな』と言われるのが嫌だった、辛い状態を認めてもらえないことが又辛かった。いまになって、あの症状が、ぱっと病名がつかないものだったことに納得がいった。やっと辛かったことを認められた感じだ」

お二人とも、友だちと話していて自分の番になると、急に固まって動けなくなってしまうなどの状態を経験しています。被爆三世の方は、この症状が今も続いているそうです。しかしかつては「どうしたの私、動かなきゃ」と頭の中でパニックに陥ってい

たものの、いまは「これが教わった被爆症状なんだ。私は静かに治るのを待っていればいいんだ」と思えるようになり、格段に楽になったそうです。
おそらく、いまも同じ症状を持ちながら、天涯孤独に生きていらっしゃる二世・三世の方がいると思います。そうした方にこの報告を届けたいです。

このほか、他に分類しきれなかった貴重な報告をここに記しておきます。
「右手に異常があり、生まれてすぐ、被爆者で歯科医の祖母に発見され、全身麻酔で手術を受けるが、当時、乳児に完治させるだけの技術はなく『仮の手術でもっと大きくなってから本手術を!』というもので、その後、右手があまり使えない生活を送る。
4歳からピアノを始めたことでリハビリにもなり、結果レントゲンをみる限り完治。感覚は少し違和感がある。疲れればその指の動きは鈍くなるし、かばえば別の指が痛み出す」
「小学5年位くらい、夜になると毎晩、ひどいじんましんで眠れず。6年の修学旅行前に主治医に1週間、静脈注射を打ち続けて何とか一度は治まる。そこら辺りから、アトピー性皮膚炎が始まる」

18. これらの結果、どのような思いをしてきたか

「子どもの頃から身体が弱いことが続き、健康に自信がないので、思い切った旅行なども避けがちになってしまった。自分の気持ちの持ちようを変えて、前向きに生きたいとは思うが…」
「小さい頃から病院通いばかりで、原因は分からなかった。こういう人は周りにはおらず、自分だけだったことからもとても重い気持ちで、長生きすることも、人生で何かを成し遂げることもできないだろうと、小さい頃から宿命に感じ、絶望感と共に生きていた」
「心から話せる友だち、悩みを打ち分けることができない精神状態が続いていた」
「これまで十数回の手術、入院を経験してきたため、新しい病気を経験する時には、病歴をメモした手帳を必ず持っていくようにしている」
「息子の顔のあざや娘の指が曲がらないことなど、私の食生活が悪かったのかなど、こどもが幼い頃はよく考えてしまった。原発事故の時には、これ以上被ばくしてはと脅えた。レントゲンなども極力控え、食生活や化学物質を気にして育てたのも、三世だからという思いから」

自分自身の身体への不安から前向きになれなかったこと、行動を抑制せざるを得なかったこと、さらにはそれを打ち明けて、話せる友を得られなかった悲しみなどが、綴られています。
また二世の親として、三世の子どもたち、四世の孫たちを見て、心配しながら「どこか自分に落ち度があったのでは」と、自分を責めてしまいがちなことも特徴です。
もちろんけして二世のせいなのではなく、原爆を落としたアメリカと、被害を放置してきた日本政府が悪いのです。それが明確にならないままに、こんな風に責めを負わされ、苦しめられてきたことも、大きな被害の一つであると言えます。

19. そんな中でアンケートをして何がプラスだったか

そんな中でこのアンケートを共にする中から、自分が孤立しているわけではないことが分かった等々、喜びの声もけっこう聞けました。

以下は被爆三世の方の言葉ですが、貴重なので記しておきます。

「めっちゃすっきりした！この気づきが私にとってギフトだ」

「それ被爆だったのか！面白い！「まじか！」という感じ」

「すごいなあ。面白いなあ。いま魂がとても喜んでいる。紐解かれていく、謎が解かれていく感じ。『この可能性があるよ』というのがとても面白い。めちゃめちゃいまこの時間に充実している」

ここに現れているのは被爆二世・三世が孤立していることです。ある意味、当然です。被爆から80年になんなんとしているのに、二世、三世に対するしっかりとした調査がなされて来なかったからです。

このため多くの二世、三世がさまざまな苦しみを抱えながら、何かそれが自分だけに起こっているもの、孤立した苦しみだと感じざるを得なくなっている。そう感じていらっしゃる方がほとんどだと思います。

だからこそこのアンケートをもっと多くの二世、三世に広げていくことに、大きな意義があります。

20. 病気・症状・体質の改善や、健康管理のためにしてきたこと

最後に、こうしたさまざまな症状、苦難を抱えてきた二世、三世が、それぞれにいろいろなことを試しながら症状を緩和し、あるいは抑え込み、より快活に生き延びてきたことも幾つか報告されました。この点の報告もしておきます。

「21歳の時に急性腸炎を発症したとき、医師が驚いていた。生理で経血がどろっとしていたが、その後、水素水を飲んでさらさらになった。水が欲しくなるときが多い。水を持ってないと怖い」

この方は水素水を飲用することを軸に、玄米食、野菜中心生活にすることで、かなり症状が緩和されたそうです。

この他にも多くの方が、添加物や農薬を避け、安全な食材を選ぶように注意を払われていて、それぞれに効果を上げています。その一つをご紹介します。

「自分の体は自分で治すことをモットーにしている。食べ物・石鹸・シャンプー・その他色々気を使っている。体を冷やさない事・食品添加物を避ける、水に注意する、電磁波に注意する、その他色々やってて、現在とても体調が良い」

漢方薬に助けられたという声も、幾つか耳にしました。

さらにこんな報告もあります。

「55歳の頃、20歳頃から飲用していたクロレラに加えて、プロポリスを飲用し始めてから、逆にほとんど風邪をひかず、ひいても養生することで早期回復するようになった」

クロレラとプロポリスがとてもよく身体に効いたようです。

さらにこのような報告もありました。
「後鼻漏については、50歳前後の頃、レーザー手術を2回受けることでほぼ解消した。ただ、常時副鼻腔炎ぎみの兆候はある」
後鼻漏など、とても辛い症状が続くようですが、こうした治療法を受けるという選択肢もあるのかも知れません。

被爆者の母が懸命のトレーニングをしてくれたという例も報告されていました。
「母は当時、小学校の養護教員だったので、放課後に上級生の野球チームに入れられトレーニングを積み重ねた。そのような体力作りをしていたが、胃が弱く、下痢が多く、また貧血で全校集会等ではよく倒れた、食事・投薬の対処は母の管理の下に行われた。この状況は中学校2年生まで続いた。
大学入学で上京したが、健康管理の重要事項を言われ、当時から年1回の健康診断を義務化（35歳からは人間ドッグ）、その結果を母に送るのが常であった。このような経過できたので、本人としては体の変化（異常）については敏感で、変化があると、何かしらあると思い、日常生活に支障をきたさない範囲でよく寝て、変化が通り過ぎるのを待つ習慣が身についていた。結果大学から今日（近々71歳）まで、大病を患ったことがないのは母の管理の結果か」

これも重要な報告です。自分の状態をしっかり把握し、健康上のさまざまな問題と向き合い、無理を重ねないなど、さまざまな生活の知恵で立ち向かうことで、結果的に大病を避け、よりよい生を送ることができるのです。みんなで参考にしたいです。
今回の私たちのアンケートでは、こうした「より良く生きるための知恵」をお聞きする欄を設けていませんでした。これがあれば、もっとたくさんの知恵をいただけたことでしょう。次回はこの点もしっかりと聞き、二世、三世のみなさんにお届けします。

以上、自由記述回答から明らかとなる被爆二世の姿～被爆二世の仲間たちに起こってきたことの報告のまとめでした。

第Ⅲ章　この世の光を受けることのできなかった二世たち

被爆二世の健康障害の中でも、とくに痛ましい事態は、この世に生を受けながらもその光を浴びることのできなかった人々があることです。すなわち、人として生きることができなかった人たちの存在です。

その事実を、客観的データなどで明らかにすることは、容易ではありません。今日まで生きることのできた人々については、今回のアンケートのような方法で直接訊ねることもできますが、この世に生を受けることができず、あるいは受けても、間もなく命を奪われていった人々の声を、聞くことはできないからです。

しかし、その被害の実態は決して小さくない。声を上げることもできず、闇に葬られるようにしてこの世を去っていった、私たちの同胞の存在。それを重く見ていく必要があります。可能な限りの方法で、その真実に迫っていきたいものです。

1. 本アンケートでは「問17」の設問で、生まれてこられなかった兄妹・姉妹がいらっしゃったかを訊ねました。

回答結果は以下の通りでした。

- 兄　4人
- 弟　1人
- 姉　2人
- 妹　1人
- 性別不明　2人

回答者計　10人

また、（回答者である）二世自身（あるいは伴侶）が流産等の経験のある人は9人でした。

2. 自由筆記回答からみる「生きることのできなかった兄弟姉妹たち」

本報告書では、アンケートの自由筆記回答の中で、「この世の光を受けることのできなかった兄弟姉妹」について触れられた箇所、及びそれらに関連した内容の回答箇所を抽出し、問題の一端に迫ることにしました。

以下、具体的な回答記述を抜粋で紹介いたします。

- 私の両親の初めての子ども（私の姉にあたる）は生まれて一日か二日で亡くなりました（死産ではない）。産声を上げなかったと聞いている。
- 母は4人の子どもを身ごもった。長女と私（次女）との間に一人をみごもったが、六ヶ月で死産したそうだ。
- 私と兄は5歳違いだが、母はその間に何度も流産したと話していた。
- 生まれて来られなかった命について、語ることが「差別を広げる」ということで隠されてきたのではないかと思う。また、遺伝的影響と結びつける、科学的根拠が得られないままである限り、事実であっても社会に投げかけるには勇気のいること

だと思う。

- 静岡県の被爆者の会で独自のアンケート調査により流産、死産の実例が出され、それを基に二世のガン検診の要望等を県に求めていき、実現させてきてくれた。「子どもたちにはなんの罪もない」と、健康を守るための制度の必要性を、被爆者の親たちが行動してくれたことに感謝したい。
- 私は2回流産して子どもはいない。結婚した頃はいたって元気だったので、被爆二世であることを意識した出来事だ。二世であることは、主人と主人の親にも結婚前に話をしており、流産後も変わらず接してもらったことには感謝している。
- 28歳の時、二人目を妊娠した。4ヶ月の頃、検診に行って異状なかったのに、夜になり出血と腹痛で2日後に流産。その後、1年間ほど、一人になると不安になったり、何とも言えないしんどさを感じることがあった。通勤の電車も、すぐ降りることができるように、普通（各駅停車）電車に乗っていた。
- 私の兄弟二人とも子どもに恵まれなかった。
- 子どもが多指で出てきた時、医師に「原爆二世なのですが関係はありますか」と尋ねたところ、「ないとは言えない」との返事だった。その娘は「40才の子宮だ」と言われ、体外受精で出産。もう一人の娘は、健康に生まれたが、その子ども（孫）が、十万人に一人と言われる肝芽腫（かんがしゅ）というガンに犯されている。被爆四世で、その様なことが出現するのかどうか分からないが、肝芽腫は今のところ原因が解っていない病だそうだ。被爆者の子孫と、そういったことの関係も、調べてみる必要があるのではないかと考えている。
- 人工妊娠中絶以外の選択肢は、残念ながらなかった（2人目の子ども、頭～お尻にかけ背中に水泡があり、育たないとの診断）
- 実姉と私の間に子どもができたようだが、流産とのこと。又、実姉の最初の子が心臓病で、3日で亡くなった。
  私の実子は2人いるが、最初の子は細胞異変で亡くなり、かきだされた。そして3度目の子が、生後6ヶ月で川崎病を患った。
- 母が弟を流産している。
- 3人目の子が6ヶ月で流産（二世だからとは思わないが）。
- 母も第一子は胎内で、「ぶどうっ子（泡状奇胎）」で出産できなかった。
- 私の兄弟だが、2～3歳上の兄と姉は、生まれてすぐに亡くなったと聞いている。
- 母は7つ上の兄を出産した後、2人目を身ごもったが、容体が悪くなって妊娠継続ができず、中絶したと聞いている。私はその後、数年を経て生れた。

付属資料

アンケート回答者別自由記述回答一覧

アンケート回答の内、自由記述によって回答された内容を、回答者別にまとめました。全員が記述されているわけではありませんが、被爆二世が、また三世が、この世に生を受けて以来どのような健康上の体験を経て今日に至っているのか、そのことを理解する一助にしていただければと思います。

1 73 歳 男 父が広島で被爆

小学生の頃、傷がもとで「化膿」し、熱を出した。夕食後「膿」を出してもらうのが「嫌」で、「こんな体質になった子を産んで」と母親を憎み、口走ったこともあった。（謝ろうとしてもその親はいない。） 又、「妹・弟」の怖いものを見るような視線が忘れられない。50歳ごろ、歯医者さんから「あなたは化膿しやすい体質だから気をつけなさい。歯槽膿漏になりやすい」と言われ、初めて自分の体質が「化膿しやすい」と知った。

鼻血もよく出していた。小学6年生の時、先生に勧められて精密検査を受けたが、「原因は分からない」と言われた。中学生になってからは、鼻血を出した記憶はあまりない。お腹もよく壊していた。夏に寝る時は「腹巻」をして寝たし、冬は「体が冷えないように気をつけていた。咳をしたらなかなか止まらない。時期季節は関係ない。

2 72 歳 男 両親が広島で被爆

幼い頃はとても元気な子どもだった。しかし二つの問題があった。

①暗幕のひかれた暗い中での映画観ると、めまいがし、ひどく気分が悪くなり、嘔吐症状もあった。このため映画鑑賞会の時は、一人で校庭で遊んでいた。

②貸し切りバスなどの乗り物酔いがひどく、とても気分が悪くなり、必ず嘔吐していた。バス旅行などの際は、事前に酔い止め薬を飲み、万全の準備をして参加していた。

しかし病気という意識はなく、医者にかかりもしなかった。二つの症状も小学校高学年になると少なくなり、中学生では完全に解消していた。

48歳の時、職場の定期健康診断で、「糖尿病」だと診断。高血圧症、高脂血症も指摘された。この時のHbA1c（糖化ヘモグロビンがどのくらいの割合で存在しているかをパーセント（％）で表したもの）が6．4％、血圧は141／95。BM1が25．8。

以来21年間、投薬と食生活改善とウォーキングを続けてきた。HbA1cは7．0を前後して上下を繰り返してきたが低下。胃癌手術によって食事量が大きく減り、その影響で直近のHbA1cは6．3に。体重も落ち、BMIは23．4。

糖尿病に関係して、ほぼ同時期から眼科の定期診察も受けるようになる。単純網膜症と診断されていて、一部出血が確認され、注意し続けることが必要となっている。

51歳頃から、歯が抜け始め、最初は部分入れ歯で対応。

56歳の頃、抜ける歯が増え始め、最終的に全歯を抜歯、総入れ歯を余儀なくされた。

60歳、内痔核発症。66歳まで4回は発症。ジオン注射での処置を続けたが、4回目に手術で切除処置をした。

68歳、11月に人間ドッグの胃カメラ検査で胃癌を発見。12月19日に全摘手術。

前年までの胃カメラ検査では異常は発見されていなかったこと、血族関係者に癌の発症で亡くなった人はないことから、宣告された時はショックだった。

幸い早期発見であり、最速で手術をすることを決断。摘出後の組織診断の結果、正式な症状名は低分化腺癌、ステージは2A。万が一の転移や再発に備えて、1年間の予定で抗癌剤を服用。

37年間の現役生活時代は、強い緊張状態の中で長く勤務を続けていて、メンタルヘルスケアを必要とする事態を招くこともあった。断崖絶壁から谷底を見るような感覚に襲われたこともあった。

3 74 歳 男 父が長崎で被爆

幼少の頃、体力的に弱かったようで、よく原因不明の発熱で死線をさまよったと聞いている。祖母が薬草の煎じたものや、猪肉等の煮汁を飲ませてくれたのを覚えている。中高生の頃から頭痛気味であったが、40歳過ぎに病院で副鼻腔炎と診断され、手術を受ける。以降、頭痛が解消された。

5 74 歳 男 父が広島で被爆

子どもの頃、保育園に通ったのは半年くらい。残りは休んだ日が多かった。虚弱体質のようで病院に通ったのを覚えている。小学校入学時の就学時検診は母親に背負われて行った。

小学校3、4年生の時、ひきつけを起こし、約十年間薬を飲んだ。同時に小・中は、体育は見学だけにしていた。

大学院の時、もう投薬不要と言われ薬はやめた。

なお、この時期、疲労すると頭痛が激しく、セデスはよく飲んだ。お酒は30歳過ぎまで飲んだことがなかった。
40代頃から腰痛が時々発症、60代末に再発。体中にストロフルス＝強いかゆみのある丘疹（皮膚にできるポツポツ）がいっぱいある。
今、足の冷え、腰の痛みはある。

6 67歳 女 両親が広島で被爆
10年くらい前から甲状腺の異常があり、服薬中。
ウイルス性の肝炎を20代前半と30代前半でしている。双方とも1ヵ月入院していて、しんどかった。C型肝炎キャリア。20代の頃は、リュウマチの症状もあったが、改善した。

7 72歳 女 父が広島で被爆
夏になると、不安、ゆううつ、だるい、という高校時代だった。心から話せる友だち、悩みを打ち分けることができない精神状態が続いていた。
病歴は盲腸19歳、十二指腸潰瘍20歳、胃ポリープ24歳。心室性期外収縮・心室頻拍、カテーテルアブレーション手術68歳。脳出血69歳（軽い）・・・言葉がゆっくりとなり、以前より少し話がたどたどしくなった。

8 70歳 男 両親が長崎で被爆
小学校の時、肋膜炎、十二指腸潰瘍を患った。
中学校の時、朝礼の時や運動会など、貧血で倒れることが多かった。学友も多く倒れていた。意識を失うことも多かった。
乗り物酔いが激しく、バスに乗ると目が廻り、すぐに嘔吐した。しかし周りの二世の多くが、同じ症状を持っていて、起こっていることを非常ととらえていなかった。

9 72歳 女 母親が広島で被爆
小学校の時は低学年で腹痛、高学年で副鼻腔炎、腹痛に悩まされた。高校生くらいからふらふらし吐き気がし、京都の病院でいろいろ検査をしたが、原因は分からずにいた。40歳前に、病院で起立性低血圧が原因と分かり、治療してから少しましになった。
鼻血が出たら止まらなくなって、難儀した思い出が恐かった。鼻血だけでなく出血するとなかなか止まらないので、怪我をしないようにしなければならなかった。自律神経が弱いように思う。

10 64歳 女 父親が広島で被爆
小学生の頃、運動をした日の夜は脚が異常にだるくて泣いていた。中学以降は治った。
10代半ばまで蓄膿症だった。いつも鼻がつまり、鼻の奥から目にかけてつんとした痛みがあったがましたが、漢方薬で完治しました。

11 68歳 女 父が広島で被爆
幼い頃から腹痛と下痢があり、今も続いている。
30歳で妊娠し、中毒症で早産だった。子どもは低体重児だったが、今は元気で障害もない。
48歳で乳がんになるまで、被爆二世ということを意識しなかった。生前父も人並み以上に元気だったので、何の不安もなく生きてきた。しかし自分が癌になると、強く意識するようになった。乳がんと妊娠中毒症、姉や息子、娘、孫のことも心配。

13 69歳 女 母が広島で被爆
結婚当初、寒冷蕁麻疹（両手、首）に悩まされた。
学生の時と、新卒の時、肝機能障害を発症して1ヵ月余り入院。点滴治療をした。現在もその名残りでB型肝炎のキャリア。子どもは3人出産。いずれも異常はなかった。

14 73 歳 女 父が広島で被爆

30代のとき、寝不足が続き、めまいで起きられなくなった。天井がグルグル回り、歩くと嘔吐するのでトイレまで這って行った。医者でめまいの注射をして血液検査をしたが、数日後の結果は異状なしだった。
40代で勤務中、急にめまいがして平衡感覚がなくなって仕事も2日休んだ。その後も2度めまいが起こったが、整体などで癒して自然に治った。しかしストレスからか不整脈に。退職していつの間にか治った。
現在は白内障を患い、数年前に心臓僧帽弁膜閉鎖症が判明。白内障は目薬をもらい、視力は保ち、心臓の方は年に1度検査。コレステロールが高かったので5～6年前から服用中。年に1度は動脈硬化の検査をしている。胆嚢にポリープができていたが心配はないとのこと。入院は出産の時のみで、弁膜症と言われるまでは健康と思っていた。息子と娘とその子(私の孫)たちは健康で問題なし。

15 53 歳 女 両親が長崎で被爆

歯が生えるのが遅く、食べるのが遅かった。口の中が小さく、奥歯の永久歯が2本欠損。心臓の弁に軽い奇形。蚊に刺されると異常に腫れあがる。
朝礼などで長時間もたず倒れた。暑さ、直射日光、紫外線にとても弱く、頭痛と胸痛が起きる。熱中症にもなった。風邪ばかりで年中寝込み、疲れやすく、保健室にしょっちゅう行っていた。大人になっても同じ。
冬場に暖房を強くし厚着をする。夏場の冷房で気分が悪くなり、失神することも。温度変化で喘息発作が起き、冬場の冷えで嘔吐発作も起こす。
じんましんが子どもの時から出やすい。現在も同じ。風邪をひくとたいてい副鼻腔炎や気管支喘息に進む。めまい、頭痛、立ち眩みが常にひどい。子どもの時から現在も。
気圧の変化に敏感で、天候が崩れるとだるさや頭痛が起きる。山で他の人より高度変化に弱い。気分が悪くなく、まったく元気な時が一体自分にはあるのか、と思うほど不調が普通。

小さい頃から病院通いばかりで、原因は分からなかった。「自律神経失調症」としか言いようがないらしかった。こういうのは周りにはおらず、自分だけだったことからも、とても重い気持ちで、長生きすることも、人生で何かを成し遂げることもできないだろうと、小さい頃から宿命に感じ、絶望感と共に生きていた。結婚する時も自分の症状と、子どもに遺伝するかもとても気になった。
東日本大震災の後で、放射能の障害について学ぶうちに、弟と姉に遺伝の可能性があると知った。父はうつ病が原因のひとつで、自殺で亡くなったが、それまで原因の分からないいくつかの症状(汗に血が混じるなど)に悩まされ、被爆が原因ではと、とても悩んでいた。65歳過ぎるまでは非常に頑健で病気一つせず、疲れ知らずだった。

16 69 歳 女 母親が広島で被爆

30歳過ぎた頃から、太陽の光がまぶしく感じることがよくあった。現在も太陽の光は強過ぎ、目が開けられないくらい辛いことがある。濃い目のサングラスを使用している。年齢もあり、近々白内障の手術をするつもりだ。

17 64 歳 女 両親が長崎で被爆

10～20代、関節炎(手足)で整形外科によく通っていたが原因不明。発熱することも多く、そういう体質だと思っていた。ストレスがたまると、胃腸炎や過呼吸もあったが、特に病院にも行かず、やり過ごしていた。
不思議なくらい急に身体のバランスが崩れたり、体調が悪くなったりすることが年々増えている。母と母の兄弟は、60歳前後から様々な病気になり、皆亡くなった。
祖父母は運ばれてきた被爆者の看護師をし、子どもたちは何ヵ月もその手伝いをした。

18 72 歳 女 両親が長崎で被爆

私自身について、森川さんと似たような症状といえば、思春期から成人して就職し、定年退職する迄の長きに亘り悩まされてきた極度の疲れ易さかと思う。人並みの体力がないために、原則3年毎の人事異動に伴う職場での長時間労働や、時に交通機関を乗り継いでの通勤などにより、病気したり、重症化して入院療養することもあった。これまで十数回の手術、入院を経験してきたため、新しく病気を受験する時には、病歴をメモした手帳を必ず持っていくようにしている。

20 73 歳 女 母親が長崎で被爆

私が生まれた時（自宅）とても小さくて、手足はしわしわだった。
小学1年生の頃か、学校へ行く途中、足が痛くて歩けなくなった。その時は、母が背負って外科？につれて行った。特に薬は出なかった。一度きりのことだった。
小学低学年の頃、夏、蚊に刺されると膿んで、薬をつけてガーゼ、バンソウコウ。自分でも出来ていたと思う。まもなく開業医の先生に妹（二つ年下）とつれて行かれてお尻に注射、ペニシリン（？）一度でよくなっていたよう。
又、私はよく転んでひざは傷だらけで、祖母が家の前の砂利を除けていたとか、「〇〇ちゃんが転ぶから…」と。
高校生の頃、近視のメガネを授業中かけていたが、それでもあまり…？！　ずっと後、40代の頃ひどい乱視といわれずっとメガネを掛けていた。今は乱視はあまりひどくなさそうで老眼鏡使用。又、緑内障、加齢黄斑変症あり、まだ薬は出ていない。
最近、美術館へ行って8000～10000歩。翌日、街歩きに誘われて行った。その翌々日、右足が痛く、立ってもいられなくなった。少し立ち止まって、又、歩いていたが、背骨の曲がりがひどいそう。

22歳で結婚。独身時代、これといって病気はしなかった。結婚生活は初めての土地で、社宅で誰一人知人もいなくてストレスいっぱいだった。長男出産後熱を出した。その3年後二男、1年半後三男出産。身体的にも精神的にも辛かった。
いつもだるく、時々発熱。三男が1歳になった頃、心臓が悪いと言われた。28歳頃でそれから無理しないように気を付けていた。外からは、病いを抱えているとは見えないようだった。今もそうらしい。
だが25年後（54歳）いよいよ来るべき時が来たと思った。緊急入院で弁置換術を受けた。その後、いろいろあった。病名は高血圧、糖尿、脳梗塞、腎臓梗塞、血腫、甲状腺腫、胸腺腫、重症筋無力症、緑内障、加齢黄斑変症、眼瞼下垂、脊柱管狭窄症、まだあったかも…。現在、朝12錠、夜6錠、就寝前2錠、ワーファリン他、薬を処方されて服薬中。一級の手帳をもらってしまった。今、薬のおかげか、体調はほぼ良好。リハビリ（整形外科）に通院中。

21 76 歳 女 父親が広島で被爆

蓄膿症で鼻呼吸ができず苦痛だった。大人になり大分よくなったが、カゼをひくと鼻の症状がひどくなり、耳鼻科で抗生物質や痛み止めを処方してもらった。中耳炎でたびたび鼓膜切開。扁桃腺がはれ発熱等、中学生前まで通院ばかりだった。
子どもの頃（小学生くらい）よく吐いた。乗り物酔いもひどかった。夏でもプールに入ったりするとじんましんが出る。足が冷える。日射で頭痛が起こり、吐き気を生ずる。

子どもの頃から身体が弱いことが続き、健康に自信がないので、思い切った旅行なども避けがちになってしまった。自分の気持ちの持ちようを変えて、前向きに生きたいとは思うが…。

22 68 歳 女 父親が広島で被爆

体が弱くよくかぜをひき、時には高熱を出して、ひきつけをおこしていた。
生後8ヶ月頃、右手親指が、弾発指（だんぱつし・ばね指）と診断される。親指の中には3本の神経があり、両側の神経が腫れて中心の神経に接触した時、指の関節が曲がる何十人に一人という、ほとんどが治らない難病。乳幼児で、早期発見のため、根気よく通院してくれたおかげで半年後に完治。
小学校低学年の頃、白血球減少症と言われた。同じ頃、心臓に雑音があるとも言われ、小・中・高と校内マラソンの前の健康診断ではいつも引っかかり、マラソン大会には出たことがない。
最近でも、病気で検査をしてもこれといって異常はないのに、体調不良で毎日の家事をするのが精いっぱいの時がある。昨年の8月は特にしんどく、1ヶ月に8回も注射、点滴、飲み薬と通院した。8月に生まれたのに、夏に弱い私です。父に似た体質です。

24 74 歳 男 父親・母親が広島で被爆

私自身は、身体全体で特定されないが痛みだす病気を十年以上経験している。「ストレスでしょう」と言われたが、原因が分からない。

25 51歳 男 父親が広島で被爆

子どもの頃は、些細なことで鼻血がでたが、外的要因があってのことなのでそれほど気にしたことはなかった。
腹痛や下痢は、大人になってからの方が顕著で、水割りの氷や火の通りが甘い肉類などで酷い腹痛を起こし下痢するが、排泄すると嘘のように治まる。
ごく稀に、酷い頭痛がある。変な例えだが、頭蓋内に鉛の重りを入れられて、ゆっくりと圧迫されるような鈍い痛みがしばらく続く。
十年程前と今年に、鼻柱部のピンポイントの激しい痛みを経験した。2回とも何の前触れもなく徐々に痛みが強くなり、数分で激痛になった。痛み止めが効き治まった。
耳鳴りも大人になってから頻発している。
これも、ごく稀に起こる現象（症状？）で、ほんの一瞬、視界が歪む。「昔のブラウン管テレビの電圧が一瞬下がって消えかかる時の様な現象」という例えが、理解してもらえるかも分からない。腹痛と耳鳴りは、頻発しているが生活出来ない程ではない。他はごく稀に起こることで、原因が分からないことが気になる。

26 73歳 女 父親が広島で被爆

小学校4年の時、肋膜炎、肝炎で療養、学校を休学する。その後も20歳くらいまでは、低色素性貧血、自律神経失調症などで常時通院。特に夏は自宅で窓から雲が動くのを見て、暮らしていたような気がする。水泳の経験はほとんどない。
子どもの時から車酔いがひどく、バス・電車・船すべてダメだった。不安をかかえて参加した高校の修学旅行は、酔い止めの薬を飲みすぎ、どの写真を見ても全く記憶にない。
しかし、20歳を過ぎた頃から、家族もびっくりするくらい元気になり、38年間の公務員生活は常に超過密、長時間労働の職場ばかりで、出張も多かったが、車酔いなど経験したことがなかった。ただ、過労気味の時に、回転性めまい、脳ヘルペスなどで受診、投薬をしたことがある。
退職後も、ボランティア活動などでハードな毎日を過ごしているが、過敏性腸炎で断続的に薬を飲む以外は、基本的に元気である。
昨年、両眼の白内障手術。今年に入って原発性変形性関節炎、骨そしょう症で通院している。

28 58歳 男 母親が長崎で被爆

今年で55歳になるが、幸いなことに今のところ大きな病気はしていない。
母親（被爆者）に似て、色白で小学生の頃は、年に1回程度皮膚病になってた。手足にブツブツが出きると病院で薬をもらっていた。
社会人になり健康診断を受けると、30歳頃からは尿酸値の値が高く、40歳過ぎには痛風を発症。今も尿酸値を抑える薬を飲んでいる。50歳頃からは高血圧気味になり薬を飲み始めた。従って今、痛風と高血圧の薬を飲んでいる。
50歳の時に突発性難聴になり、1週間入院。 左耳がほとんど聞こえなくなったが、治療の効果がありほぼ聞こえるようになった。

29 72歳 男 父親が広島で被爆

森川さんの記述は自分のことのよう。それぞれの症状の強弱は、森川さんの方が重く、私の方が20～30％程度の症状。

幼少期―「心臓弁膜症だから激しい運動はしてはいけない」と言われていた。
小学校期―3年～慢性湿潤性中耳炎がわかり通院が始まり、夏の陽気になると、右から化膿し耳垂れが出始める。
3年生の終わりの頃、咳・痰を絡む風邪で十日間休む。（勉学が辛くなった。）
風邪は季節の変わり目には必ずかかり、回復も多くの時間がかかり、なぜ自分だけ風邪をひくかと思っていた。
4年、虚弱体質なのか食事が進まず整体マッサージに連れられていた。ソフトボールで肘を痛めて満足に投げられなくなり整体マッサージに通う。回復までに2～3年かかり自然と諦めた。
5年生の夏前に、BCG 予防接種の痕が塞がらず、一夏中プールに入れなく惨めになった。

6年生の懸垂テストで1回もできなかった。

5～中1年生の夏休みに、皮膚のかぶれ(漆負け、櫨の木＝ハゼノキ負け、仏壇製造の友達宅へ通学の途中で立ち寄ったり、櫨の木の近くや下を通るだけで)になった。3年連続で罹患した。友達はかからず自分だけ罹患する。
右の瞼が腫れ上がり、約1週間外出できず惨めになって夏休みが来るのが怖くなる。治療は患部にさつま揚げを塗りつけて、そのさつま揚げを食べてしまう民間療法だった。現在も街路樹の下を通る時は、櫨の木ではないか確認する習慣が抜けない。

中学校期―小学高学年の頃から急性の下痢があらわれるようになった。(原因は両親の口喧嘩)。
父親の体調が優れず、農作業を休みがちで母親がヒステリックになり金切り声で詰めることがままあり、その声を聞いた途端に急激に便意を催し便所に駆け込んでいた。実業の担い手・家事・子供の育児・子供との死別(第二子、第四子)・老人介護(祖父母・高祖母)などの事象が母一人に圧し掛かる。

中1年―バスケットボールクラブに入部し、屋外コートで活動したが、夏休みに入った途端、急激に疲れが出て起き上がれなくなり1週間ほど寝込む。心底疲れた感じ。
トイレに四つん這いで吐きに行った。
中1年変声期を境に低音域が出ないように(引っかかる・しわがれた)感じ、その後現在も同様であまり歌ったり喋ったりが楽しくない。
中学校期を通して父親が私を見て、寝起きなど表情が冴えないのか、人間だから少しはどうかあると、諭されていた。
中3高校受験で勉強らしきことをするが、右眼に異変を感じて眼科受診した。視野が随分と狭くなっていると診断された。
中3高校受験当日も風邪で(鼻水・咳・痰・マスク)全く集中できなかった。

高校期―クラブ活動で陸上競技に入ったが、試合の前になると　喉痛が始まり体調が悪くなった。(体調管理に苦労した。夏場、当時クーラーはなく扇風機に当たるのも嫌で、ガラス窓を1センチ開放して室温の調整に気を配った。)
高校2年生、風邪を拗らせて2ヶ月ほどクラブ活動ができなかった。体調がスッキリせず静脈注射(栄養剤)に通う。
高校2年の時、父親からやっと男の体つきになってきたと言われた。(筋骨が多少しっかりしてきたのを喜んだ発言だったのか。)自分だけ何時も弱々しい体付きなのかと思っていた。高校卒前に鼻中隔の手術で1週間入院する。
大学校期―同好会で趣味的にランニングを続け楽しむが、度々膝や踵の腱を痛め通院加療した。

社会人(団体職員)になって
3年目あたりで胃潰瘍・十二指腸潰瘍にかかり通院。治療は週1度の注射を7本打てば治ると言われ、一度は回復したが、時期を置いて再発した。その後生活に注意を払い、煎じ薬「せんぶり」などを常備して十年間程飲用した。
併せて痔核がビリビリ痛くなり苦労して現在も座薬を病院でいただき使用している。刺激物が障るようで、酒・タバコ・コーヒー・唐辛子を極力避ける生活を続けている。

5年目(27歳)に結婚して1年後、4年後、7年後に子供を授かる。(3年後に流産する。)
7年目(30歳)咽喉痛でタバコを受け付けなくなり耳鼻科通院を始める。
9年目(31歳)に海外研修団体旅行に2週間出かけたが、2日目から喉痛・風邪症状が顕れてほうほうの体で帰国。出かける前から胃の調子がスッキリせず風邪気味で事前に薬を準備して行ったが苦痛だった。この頃から風邪で会社を休むようになった。土日の休養だけでは快復しない。
体調がよければ何もなく、休日には普段の運動不足を解消する手段としてランニングやスイミングにでかけた

りしていたが、次第に疲れが残るようになってきた。

10年目（32歳）頃、季節の変わり目などで風邪を繰り返して、昼休みに職場の近くの耳鼻咽喉科へ通う。咽頭が腫れて、痛みも伴い眠れなく喉元を保冷剤で冷やしたりしてしのいだ。（体温は平熱で局部が痛み辛い症状となる）
12年目（36歳）、春先から風邪症状（指先のしびれが顕れたり）咽頭が腫れて白い膜で喉元を締め付けられる症状。喋ることが苦痛になり歩くことも出来なく、併せて右胸側部から息が抜ける症状があらわれて近くの総合病院へ入院した。入院は十日間だったが、日中ほとんど点滴と睡眠を繰り返していた。入院先はまだレントゲン検査のみで CT などはなく、気管にカメラを入れ検査したが、特段の異常は見られない診断であった。
この頃、仕事中に突然頭の中が真っ白になり、何をしているのかと不思議に思った。また、体調の不良がしばらく続き、その過程で右の耳に異変を感じたら鼓膜に穴が穴いていた。その後、穴を塞ぐ治療を受けたが、現在も開いたままになっている。
漢方の煎じ薬を飲んだり、家庭に蒸気式吸入器を備えて体調不良時に使用しているが、咽喉や鼻が丈夫になることはない。趣味的に続けたランニング・スイミングは出来なくなった。

12年目（36歳）、咽喉を腫らす体質は相変わらず、喉元を締め付けられる症状・息苦しさ・右胸部痛み症状は無くならず、半年後に転勤に伴い、新しい病院で胸部のレントゲン写真では左右の胸に十円玉サイズから極小の斑点まで6～7ヶ所投影されていた。（これまで幾度となくレントゲン撮影をしたが、初めてであり、先生の見解は肺と横隔膜が癒着している。残念ですがこれは取れないと言われた。）
体調・咽喉に良くないと思われる夜のお付き合いは避けるようになり、咽喉部分に注意を払うが季節の変わり目には耳鼻科へ通院した。

16年目（40歳）夏が出勤時から頭痛があらわれて帽子を被り電車通勤した。勤務時間帯も頭痛に悩まされ、保冷剤を両側頭に巻きつけて就寝した。3年程続き近くの総合病院で MRI 検査をするが異常なし。
18年目（42歳）陰嚢胞（睾丸の袋の静脈瘤）で通院始める。湯上がりなどにタオルの拭き方が強すぎたりした場合、突然出血する。（バスマットに血痕が血液がボタボタ落ちる。）老人腫との診断で、乾燥させないように湯上がり保湿軟膏を現在も使用している。

26年目（50歳）単身赴任始める。夏場の日差しが眩しく感じ始める。
33年目（57歳）高血圧（下が高い）投薬始め現在に至る。
34年目（58歳）蓄膿症（約一ヶ月投薬：抗生物質）
36年目（60歳）定年雇用・現業部門への配属。極度の倦怠感・膝ががっくり落ちる症状が見られた。めまい、耳鳴り、フラフラ・吐き気などにより通院始める。

37年目（61歳）体調不良により2ヶ月間休養したが快復が見られず依頼退職する。極度の倦怠感・めまい・耳鳴り・フラフラ・眩しさ・吐き気など。広島ぶらぶら病的症状

62歳以来在宅加療・静養する。内科・耳鼻科・眼科・皮膚科・消化器科・整形外科。
63歳、明け方（就寝中）不整脈（突然の心臓バクバクで驚く）
65歳、5月横浜駅構内で突然意識を無くし救急車搬送（CT 検査異常なし）
66歳、9月明け方（就寝中）不整脈（突然の心臓バクバクで驚く、2度目。）
　　9月蓄膿症（約一ヶ月投薬・抗生物質）

67歳、夜間頻尿や昼間に尿意・尿漏れが現れる症状で受診する。投薬中「前立腺肥大による排尿障害」
68歳、5月明け方（就寝中）不整脈（突然の心臓バクバクで驚く、3度目。）
　　7月～中耳炎・蓄膿症を繰り返す（通院加療中）
8月～前立腺肥大検査で左腎臓腫瘤性病変見つかる。
以上のように、これまで幾多の病気に罹患しましたが、不思議と熱が出ない体質。

30 66 歳 女 母親が広島で被爆

ほとんど幼稚園にも通わず、家で気管支炎のため弟（3歳下）と枕を並べて寝ていることが多かった。 小学校3年生まではすぐにしんどくなって保健室に通っていた。4年生からは体も成長したこともあったのか、学校を休むこともなくなった。
40代くらいからひどいめまいが起こるようになった。

31 58 歳 女 母親が長崎で被爆

2008 年に突然声が出なくなり精密検査を受けると甲状腺がんが見つかった。2008年に手術を受けて、翌年に再発。2009年にも手術。2015年にまた再発。3度目の手術をうけた。同年手術で取りきれていないがんのためにアイソトープ治療を受けた。 現在も定期的に検査を受けている。

32 69 歳 男 父親・母親が広島で被爆

5歳の時、風邪のため診察を受け心音に異常が見つかる。精密検査の結果、心臓の壁に穴があいていることが判明。病名：心臓壁欠損症。（心臓の壁に直径1センチの穴が3個）当時の医療では手術不可ということで、この子は二十歳までは生きられないとの診断がされる。
ABCC から1年に1回ジープが家まで迎えに来るようになる。血を抜き取られる検査は嫌だったが、そこに置いてある木馬や当時としては珍しいコーヒーと美味しいサンドイッチが出てそれが楽しみだった。
5年後、超低体温手術を受けてみてはという薦めがあり、10歳の時手術を受ける。その後、経過良好で遠足にも体育の授業もうけることができだす。駆け足も水泳も野球も今まで禁止されていた運動全てができるようになった。毎年の冬ひどいしもやけやひび割れ、胸の痛み、発作から解放される。厳しいカテーテル検査からも解放される。
その後、20歳になるまでこれといった病気はしていない。

21歳で始めて突然胃潰瘍で入院。7年周期で入院を繰り返すことになる。2回目の入院は出血性十二指腸潰瘍。3回目が出血性潰瘍。
42歳の時、大学病院の勧めでピロリ菌の除去施行を河村病院にて行う。10人中7人くらいの成功率とのことだったが、見事にクリア。痛みから二十数年ぶりに解放される。

57歳頃、健康診断で高血圧と高脂血症の診断が出る。薬による治療を現在も続く。
59歳で椎間板ヘルニア、以降腰に爆弾を抱えることになる。ちょくちょく再発する。
60歳、突然腹痛が起こり、激しい痛みで下痢、嘔吐、夜間救急で診察を受ける。即、緊急手術となる。腸閉塞、原因不明とのこと。もう少し遅れると危ないところだった。
65歳、左手首に激痛。ドケルバン病の診断を受ける。（親指を広げると手関節の母指側の部分に腱が張って皮下に2本の線が浮かび上がる。ドケルバン病はその母指側の線である短母指伸筋腱と長母指外転筋が手首の背側にある手背第一コンパートメントを通るところに生じる腱鞘炎。
66歳、左足付け根から足先まで激痛が起きる。腰痛からきているとの診断。

33 69 歳 男 母が広島で被爆

3歳の時に熱が下がらず医者から覚悟してくださいと言われた。乳幼児に与えてはいけないアスピリンを使ってみた。投与するとすぐに熱が下がり生き残った。風邪をひくと気管支炎にはならないが、インフルエンザの予防接種をするとすぐにかかった。クラスで流行る頃は元気だった。毎年予防接種で発病していた。2日後か3日後。
普通の風邪もよくひいていた。熱が出るとペニシリンを打たれるのがたまらなかった。
熱が上がると危ないと判断してすぐに熱が出るとそうしてしまう。

大人になって斜視と言われた。子どもの頃は気がついていなかった。野球部の時に目測がずれてよくボロボロ落とした。外野フライの時にうっかり目をつぶると取れた。見ていると落とす。
膿んでしまう。化膿してなかなか治らない。カサブタができてもその下がグチュグチュ。

自分は3歳で死にかかり、妹は3歳で亡くなった。
腱鞘炎は子供の頃からよくあった。足もなった。そんなに使ってないのに。
目をつむると光が走る。いまもそう。 星が目の周りに出たり、光が走ったりする。
鼻血はしょっちゅう出ていた。どっとでる。 勉強している時など。高校までよく出た。
慢性副鼻腔炎ということで高校2～3年の春休みに手術。それ以降は出なくなった。

3．11の時に翌日千葉に戻って習志野駅に降りたらタラーと出た。それまで何十年出してなかった。去年1月に鼻血がボロボロ出た。

小学校6年生の時に体重が36キロ。がりがりだった。食が細かった。

13歳、肋間神経痛。
中2の3学期から首筋にぐりぐり腫瘍、3年生の時も。高校2年の時に消えた。
肺炎を疑うが、ツベルクリン反応陰性。BCG も何度打ってもやがて陰性に。
15歳、高校で病院通い。冬になると風邪。アリナミンの静脈注射でアナヒラキーショック。よく腹をこわし、下痢はしょっちゅうだった。
20歳の時55キロ。大学4年生から太り、23歳の時には100キロ近くあった。

22歳で荒川区役所、国民年金課保険料係
23歳の10月に職場で倒れた、尿管結石。救急車で運ばれた。 そうしたら肝臓の数値が悪くなっていた。顔が真っ黄色になっていた。劇症肝炎を起こしていた。最大数値900。石はすぐに出た。
役所を病欠、実家の病院に入った。
ベッドに入らずに実家に3ヶ月半いて療養。毎週血液検査、GOT・GPT が900で危ない世界。入院している時は下がって500～600、段々下がるけど300位で止まっている。医師がストレスで高くなっていると、「仕事に復帰したいか？その方が下がるかも」と。それで復帰したら下がった。療養していることでのストレスだった。顔が真っ黄色、尿が真っ白。バリウムの後みたい。数値が止まっている時に、便は正常になっていった。復帰したら70台まで下がった。

28歳、実家で3ヶ月休養　毎週血液検査
33歳、職場で倒れた。 血圧を測ったら下が200までいって測定不能だった。脳梗塞後遺症はなかった。だから正確には脳梗塞の疑いで2週間入院。
その後役場の仕事がきつくなり、夏に34歳前にまた倒れた。お酒を飲まないといけない状態。3本くらい飲まないといけない。アル中に、労災。
アパート住まい。過労死寸前の労働。このころ結婚。
脳梗塞により精神病院に3ヶ月入院。脳梗塞の後遺症で鬱に。朝に酒を飲まないといけない。夕方になると手に震えがきていたが、アル中は自分で克服。

34歳、10月に復帰。精神安定剤を使う。
30代から倒れたりを繰り返していた。アトピーも良くなった。4月5月がひどい。皮膚が弱い。傷ができると治らない。
43歳、糖尿病になっていた。62キロまで痩せた。肝臓を悪くしたときも70キロまで落ちた。直前は100キロ近かった。今でも糖尿病、食事療法。
それまで風邪をひいたいりはしていた。40代でぎっくり腰。
五十肩、40代でなった。肩が上がらなくなった。
51歳に係長級に昇進。
53歳、悪性高血圧。上が200下は130、210の140とか。
その後半年休職。でも昼間は家にいられない。入れてもらえない。家の鍵を持たない。漫画喫茶にいた。脳梗塞を起こしてから、時々記憶が欠落。

55歳、睡眠時無呼吸症候群が発見された。1晩50回くらい。口に装着して強制的に酸素を送り込むもの。CPAP 装着。
58歳、脳梗塞。呂律がまわらなくなり、
すぐに入院。点滴で血栓を溶かす。1日で良くなる。翌日には呂律がまわらない状態が消えた。5日間入院。その後も脳梗塞を繰り返している。
61歳、度々眼底出血。

森川さんとの異同
下痢はずっとしている。パンツが汚れる時もあり困った。顔面痛については顔が痺れたことがあった。足に激痛が走った。寝ている間に手にも。座っている時にもいきなり激痛がくる。本当に痛い。急に来る。
肋間神経痛、痛い時には息もできない。中学1年生まで。

目は最初から乱視、斜視。老眼は30代から。自律神経の乱れはしょっちゅう。
潰瘍があった。副鼻腔炎があった。
子どもの頃の症状がまだ起こっている。油が飛んで火傷すると傷になって痛い。1ヶ月くらいグジュグジュしている。傷の再生力が衰えている。
花粉症は26歳から。気管支喘息もあった。昔から手足が冷える。一時期スポーツをして良くなった。年を取ってから昔のように冷えるようになった。

頻尿傾向が強くなっている。夜はトイレも2回は行く。 夜中と明け方。
排尿促進剤を飲んでいる。43歳から糖尿も持っているので。
身体に赤紫の斑点があらわれたり、消えたりすることがあった。
内蔵が弱い。夏は割と強い。暑いのは嫌ではない。
野球をやったので汗をたくさんかいた。汗腺が人より多いと医師に言われた。
小学校3年2学期から6年まで給食なし。北海道の小学校では給食がなかった。
小学校3年、4年、腸カタルに。給食を食べられなかった。
微熱・頭痛・胃の痛み・手足の痛み・めまい・吐き気に悩まされた。
食べ物を吐いてしまう。腸カタルは腸の粘膜にふきでものができて消化がうまくできない。

34 72 歳 女 父親が広島で被爆
子どもの頃便秘に悩まされたが。食生活を変えたら改善。しかし時々下痢をする。

37 71 歳 男 両親が広島で被爆
小学校のころツベルクリン反応で陽性だった。小さいとき扁桃腺はよくはれるので熱が出て早めにイソジンでうがい。熱が出ないように注意している。
20代のころ扁桃腺が腫れ過ぎで、食べ物が入らなくなり1週間ぐらい食べられなかったことがある。20歳ごろから腰痛になりやすい。
20歳の時に、十二指腸潰瘍になり 酒、たばこ、コーヒーを断って治療。1ヶ月ぐらい毎日通院。

40歳で老眼
45歳ぐらい糖尿病高血圧今も治療中
45歳ぐらい尿管結石、前立腺肥大
47歳ぐらいから花粉症
50歳、うつ病、今も続いている。脳梗塞になってから。
64歳脳梗塞、1ヶ月間入院。3ヶ月ぐらいで目が正常に動くようになった
バランス感覚は4年経って元通りなってきた、しびれは残る
65歳、再発1年ぐらい治療
現在は、精神科は4週間に1回、糖尿内科3ヶ月に1回、眼科6ヶ月に1回、耳鼻咽喉科年に1、2回通院。

38 73 歳 女 両親が広島で被爆
中学2年位から偏頭痛に悩まされて、今でもたまに偏頭痛がある。
漢方薬を飲んでいたので体調は普通。
中学校では水泳部に入り、トロフィーももらうほどになった。高校は少林寺拳法部に入り黒帯。
最初の子は死産。死因は不明。2人目は無事に長男を出産。4080g。次男も4120g あり、最後に4260gの女の子を出産。
痺れ、手足の静脈の怒張、浮腫が生じやすい。発汗過多、衣類がびしょびしょになる。
気候の変わり目で眩暈、頭重、頭痛が起きる。雨の降るのが分かる。

父の方が内部被曝で苦しんでいたように思う。母は夏になると火傷のケロイド部分から、血に混じって膿が出てくるのを治療していたのを思い出す。

兄は広島で産まれて新型爆弾で被爆し、8月13日に死亡したことを妊産婦手帳に書かれていた。

鼻血は孫、小学生、中学生、高校生、3人ともすぐ出る。

高校生なのに月経不順で産婦人科にかかってピルを飲んでいる。
自律神経失調症がある。ひきこもり中。頭痛がある。

四世の一番下の女の子は幼い時から小さい。

四世が常習便秘、腹痛、食中毒を起こしやすい、嘔吐、胃腸潰瘍などがある。
疲れやすい。朝礼で立っていられない。

長男(三世)は結婚して女の子が二人生まれたが、40歳を過ぎて痔児の手術をしてから、胃の手術をして胆のうも摘出した。次男は元気で、長女は初めての孫を産むときに同時に子宮がんの摘出をしてもらった。あとに二人の女の子を産んだ。
3人目の女の子は生まれてからずっと小さくてぜん息で何回も入退院。小2から元気だが、鼻血が時々出ている。

長女の死産のことを思い出すと、頭痛が先に出て何も手に付かず、何もできない状態になる。今でも原因を考えてしまう。一度も抱かせてもらえず見せてもらえず、焼かれてしまった。母乳がいっぱい出て、お布団がビショビショになってバスタオルで巻いて、何回変えても洗濯しても腐ってしまう。悲しくて悲しくて泣けなかった。今でも頭痛になるので、本当は考えたくないです。

40 53 歳 女 母親が広島で被爆
子どもの頃から何か病気を発症するとこじらせてばかり。風邪をひくと咳だけが残り、ひどい時は2、3ヶ月も咳こんだ。喘息のような、乾いた咳が何分も続くので咳止めを服用。しかし喘息では無いようだ。

20歳の頃に足首の靭帯を切ったことで手術をした。1ヶ月後にギブスを外すと足の皮膚が腐っていて骨が見えていた。その後、治療を続け、2年後に汚いながらも傷口がふさがった。

40歳ぐらいで亜急性甲状腺炎になり、半年ほど仕事も休み休みに。自律神経失調症でめまいがひどく、1ヶ月ほど仕事ができなかったことも。
44歳で子宮筋腫で、腹痛がひどかったが、どの医者にも「子宮筋腫は痛みを伴うものではなく、年齢的に治療で対象ではない」と、何もしてもらえなかった。
半年ほどの我慢の末に自宅で痛みに倒れ、救急車で病院に運ばれたが、何なのか不明なまま返された。翌日、違う病院にかかり、5日後には手術をしてやっと痛みの原因が分かった。

筋腫のできていた位置が、医者たちの思っていた子宮の外に着いたこぶ状ではなく、子宮の壁内部にできており、卵巣の周りに腹膜が癒着していたことで痛みがあった。
術後4日目で、原因不明の動脈破裂を腹内で発症し、2週間の入院生活に。おなか全体がむらさき色で大きく腫れていて、死ぬのかと思った。

高校生のときから胃が弱く、胃潰瘍は何度もしている。現在甲状腺に腫瘍があり、年々少しずつ大きくなりつつある。
歯はとても弱い。奥歯が自然に縦に割れてしまいやむなく抜いた。
急な大量の発汗、どうき、眩暈などがある。
麻酔が効かず、手術中に痛くなる事は度々。

42 67歳 男 父が広島で被爆
小学生で盲腸の手術
中学生で部活動の疲れで腎臓炎、数日の入院。
大学生で尿管結石で1ヶ月入院。
その後、腎臓に絶えず結石を持ち、40歳代に2回、痛風に罹り、しばらく薬治療。
その後も何回か尿管を通して排出。7年前には結石が動かず入院しては再手術した。10年前から血糖値が上がり、糖尿病と診断され、月1回の検査を実施。薬治療を受けているがインスリン注射は受けていない。
学生の頃から脱肛の症状あり。長時間の立ちっぱなしや歩き続けると発生する。排便の際にも発生する。紙を通して指で抑えれば収まるので、病院にはかかっていない。

43 74歳 男 母親が広島で被爆
虫にさされた時にしばしば傷口が膿む。子どもの頃から起こっており、治りにくい体質は今も続く。

23歳、職場の冷房で体が冷えるようになった。60歳で退職するまで冷え性が続く。今は冷房の無い生活で症状は出ないが、冷房が効いている所では冷える。
花粉症は36歳発症。最初は目のかゆみ、翌年からは咳・くしゃみ。杉と檜の花粉症。毎年、3月～5月連休位の間、症状が出る。トラック、バスの近くでは咳・くしゃみが良く出る。
50歳代から、胃酸過多で食後2時間くらいして胃に痛みを感じることがしばしば起こるようになった。

歯について
①親知らずは19～21歳で下左右両方が生えかかり抜歯。
上右は、50歳代で向かって生え出したので抜歯。上左はまだ残っている。
②40歳代後半から奥歯が傷みだし、歯科医は歯槽膿漏だと言って次々と抜歯。結果、奥歯は4本とも無くなった。
③21歳ごろに知覚過敏症となり、下中央の前歯2本の神経を取った。

ガンについて
①64歳、前立腺癌の疑いで経過観察後、翌年癌と確定した。化学療法で治療したが、69歳前立腺摘出手術をした。

目に関して
① 狭隅角眼、左網膜委縮が判明64歳。
② 小学生から中学生の時、しばしば霰粒腫になった。大人になってから手術もした。
③ 視力は良かったが、40歳代で老眼になった。また、左目が乱視と判明した。

その他の症状
① 紫外線アレルギー66歳発症

② 中耳炎に小学校頃までよくかかった。
③ 帯状疱疹61歳発症
④ 耳鳴り51歳頃から続く

44 70 歳 女 母親が長崎で被爆
小学生の頃はすぐ扁桃腺が化膿して白くなり、のどが痛かった。「扁桃腺の削除」を勧められたが受けなかった。
46歳で翼状片という紫外線による目の病気になり、右眼の手術を受けた。同じ保育士でこの病気になった人も周りにいない。10年後にまた手術が必要となった。
46歳で脳内出血。静脈が切れたが自然とバイパスができたので医師が驚いていた。点滴の治療。何も障害も出なかった。数年に1回CTを撮っている。その時の血液の精密検査で貧血と子宮筋腫が分かり治療した。

58歳頃、時々心臓がバクバクするようになり検査を受けたが、心電図に異常がないので、分からなかった。循環器科の医師から「先天的な血管の異常があったのかもしれない」と言われた。とにかく心臓の異常を感じたら、すぐ心電図を撮るように言われていたので、病院に駆け込んだところ、即入院となった。急性心房細動だった。
66歳の冬、咳がひどくなり、喘息と診断された。1シーズンで8回点滴を受けた。
抗生物質の副作用で下痢をすることが多く、これもダメ、これもダメと4種類、薬手帳に記入している。

45 72 歳 女 父親が広島で被爆
小学生の頃、運動をすると、体や腕に赤い斑点がブツブツと出ることがあり、とても不安になった。
ひどい乗り物酔いで酔うと必ず嘔吐していた。ブランコに乗っても気分が悪くなった。
朝礼などで長い間立っていると腰、胃のあたりがしんどくて、とても辛かったが、高校の頃にはそのようなことはなくなっていた。
時々、見えるものすべてが白っぽくなることがあり、しばらくすると元に戻る。子どもの頃には頻繁にあったが、40歳の頃から気にならなくなった。
現在、高血圧、コレステロール、心臓の薬を服用中。

48 64 歳 男 父親が広島で被爆
53歳、ガンが4ヶ所発生（肝臓、腸、前立腺・胃）。中医の診たて。いずれもステージ1以前。肝臓はステージ1に該当していた。
徹底した食事療法などで半年から1年かけてほぼ良くなった。
その後も胸に良性腫瘍があり、ストレスが強くなると大きくなりだすが、対応をすることで良い状態に戻すことを繰り返している。
40代後半から前立腺肥大症になり閉尿しカテーテルを挿入することが何度かあった。
55歳で海外訪問中に肥大が悪化し腎炎に。帰国し1ヶ月後に前立腺肥大解消のための手術を受けた。経過は大変良く、今は不自由は感じていない。
57歳、坐骨神経痛に襲われ歩行困難。気功治療などを経て良くなったが、その後も冬の寒い時期にぶり返し。冬にオイルカイロ、腹巻などを使用し、靴下もまめにはいて冷え対策をすることでしのぎ続けたが、コロナ禍で1日10キロ歩くようになってから完全に解消した。冬もカイロいらずに戻った。

49 71 歳 女 母親が広島で被爆
血圧が高く、薬を飲んでいて気にしている。胃腸も弱く、これも気になる。

50 61 歳 男 母親が広島で被爆
自律神経失調症で年に数回ひどい腹痛がある。
今も精神科へ通院し、毎日の薬と頓服をもらっている。弟がうつ病だがそうならないように、気を楽に持つことを心掛けている。

小学校の頃、朝礼で直立していると気分が悪くなることが多かった。
アルコールがまったく飲めない。ラム酒入りのお菓子を食べるだけで体調が悪くなる。
薬のアレルギーが数種類ほどある。飲める薬が少ない。風邪の時は座薬をもらう。
一方で体に合う薬もありよく効く。
55歳くらいの時のインフルエンザ罹患時、子ども向けの薬をもらったが、よく効いた。
自律神経失調症の原因は、厳格な家庭で育ったこと、まじめ過ぎる性格、職場や家庭でのストレスにあるように感じる。

51 54 歳 女 母親が広島で被爆
ケガをしたら治りにくく、虫刺されも治りにくい。
祖母、母、私ともに不整脈がある。

52 74 歳 女 父親・母親が広島で被爆
私も母親と同じように胆嚢炎（胆石症）を発症して、胆嚢切除手術をした。
私の息子二人は小学校へ上がる頃まではよく大量の鼻血を出していた。
長男は、生後1ヶ月健診で、心臓に雑音が混じるということで検査をした。診断は「機能性雑音」ということで、特に治療の必要はないものだった。
次男は下痢をすることが多かった。長男、次男ともに扁桃腺手術をした。

傷跡が化膿し、ケロイド状になりやすい。子供の頃、成人して以降も、たびたび手足に赤紫の斑点が出たり消えたりした。
この2～3年、耳鳴りと時々起こる眩暈（めまい）に悩まされている。

54 64 歳 女 父親が長崎で被爆
小・中・高時代は、鼻水が出ていた。
現在は、鼻は喉の方に流れて鼻が出ない。そうなると何度つばをのみこんでもいつも口喉に何かある様な感じがする。
冬の夜など喉が狭くなった様で、唾液も通りにくく感じせき込むことが多い。口喉が痛くなることも多い後鼻漏ではないか。現在も続いている。
子どもの頃は年に1回必ず扁桃腺からの熱が 39℃以上出ていた。嫁いでからは激しい花粉症にみまわれタンポポで花飾りを作ると瞼の上下がくっつく程、腫れ上がったり、くしゃみが連発し失禁をするほど。現在はどちらもない。

55 73 歳 女 父親が広島で被爆
小学校入学前まで発熱を繰り返した。中学校の頃？まで鼻血をよく出していた。
成人後も急いで鼻血（＋）すぐ止血するが、年1回？生理中、貧血傾向。
20歳で働き、3年後に職業病（腰痛・けいわん症）で通院。
運転中に後ろを振り向いた時、目の前が黒くなり（意識なし）「物損事故」、意識は病院で戻った。「肩こりによる頸椎圧迫のためだろう」と言われる。

56 42 歳（被爆三世） 男
父や家族そろって耳鼻が悪く、風邪をひくとすぐ中耳炎になる。
また、副鼻腔炎にも毎年何回も悩まされる。
ケガをすると必ず傷跡がケロイドのようなアザになって残る。

57 69 歳 女 母親が広島で被爆
幼少の頃から、気管支炎と扁桃腺肥大でよく発熱。
ケガをしても、虫に刺されても、腫れて化膿したり水ぶくれができたりして治りが悪い。

結婚して、第一子は稽留流産で手術をした。（24歳）
月経異常もあり、無月経が1年間程ありホルモン治療もした。
気管支喘息の診断が高校卒業してからつく。
副鼻腔炎で味覚臭覚が全くなくなり、たびたび薬を使用して治ったりの繰り返し。
腰痛椎間板ヘルニアと頚のヘルニアもあり。
坐骨神経症が最近はじまり末梢神経障害の薬も使用している。

59 69 歳 女 母親が広島で被爆

小さい頃から、下痢と激しい腹痛に悩まされました。
56歳で体力の限界を感じて仕事を辞めてからも、症状は続いたが、数年前に激しい下痢と嘔吐くり返し、その後、受診したら宿便があり、便をやわらかくする薬を服用しだして、やっと治まってきた。大腸カメラでは虚血性腸炎の跡もあった。大腸に良性ポリープも。
20歳の頃から腰椎の椎間板ヘルニアがあり、腰椎の分離症、すべり症で腰痛が持続。ヘルニアは何度もおこした。
40代から骨粗鬆症で治療しており足の骨折も2回。変形性脊椎症と言われている。頸椎はまだヘルニアまではなっていないが変形はあり。頚～背中～腰～足にかけての痛みが常態化して、時に歩けなくなる。
目は片方の視神経が逆についており（乳頭逆位）、白内障もあり視力低下や視野狭窄があり、点眼薬を続けている。
副鼻腔炎がここ数年悪化し、時に発熱あり。扁桃腺炎も繰り返し。
心臓の位置異常があり、坂道は息切れするが、平地は歩いても大丈夫。今のところ治療の必要ないとのこと。

幼少の頃から下痢に悩まされた。発汗が異常に多くなったのは中年になってから。48才で子宮亜脱のため子宮摘出術をしてからひどくなった。
子供の頃から熱はよく出していた。扁桃腺炎によるものだったり、肺炎も何度かおこした。喘息気味で呼吸器が弱い。

60 73 歳 女 父親が広島で被爆

森川さんが書かれている症状について、共通のものは、以下のとおり。
①子どもの頃、傷口が化膿しやすかった。傷をすると治りにくく白い膿がたまることが多かった。子どもの頃、ガラスで切った跡がケロイド状になった
②小学校4年生の時、蓄膿症で耳鼻科に通った。
③60歳過ぎてから、風邪をひくと長びき気管支炎となり、咳、痰がしばらく続くようになった。

61 61 歳 女 父親が広島で被爆

40歳～甲状腺腫病　腰部椎間板　肩関節周囲炎･･･治療中

62 76 歳 女 父親が広島で被爆

母は、私を出産して間もなく大病にかかり生死をさまよった。私は、乳の出る叔母にあずけられ1年位育ててもらった。（母の実家の島原）
3～5歳頃は、夜になると目が見えなくて、よく庭の溝に落ちていた。
小学生頃から、疲れやすいと感じていた。夏バテして食欲なくなり体重が減った。高校生の頃もそうだった。
季節の変わり目には口の周りに熱をもった出来ものヘルペスができて痛かった。大人になるまで続き、一時は忘れるぐらいになったが、今でも疲れすぎるとヘルペスが口の周囲に出来る。
小学生の頃は、外で走り回っても他の子より疲れやすく横になって休むことが多かった。運動会や遠足の後は必ず寝ていた。疲れると下痢しやすいのは今もそう。他の同世代よりスタミナが少ないと感じていた。
小学低学年、高校生の頃、腎炎と診断されたが、自然に治まった。症状は、顔面がむくむ。尿に蛋白が出る。身が疲れやすい。遠足や運動会の後は必ず横になって寝ていた。塩分制限水分をしっかりとるよう指導され、夏はスイカをよく食べさせてくれた。

夏は体重が減って（3～5kg）。げっそりとなり食欲低下、夏バテしやすく、冬は体重もどった。その後は尿蛋白（-）。体力が弱いと小学生の頃より感じていた。
看護学校に進んだが、肺湿潤にかかり卒業が2ヶ月遅れた。
夜勤など10年間はなんとか続けられたが、35歳、体力的に無理で昼間だけの診療所で働いた。44歳で結婚し家庭に入り（仕事止め）現在に至る。子どもなし。
65歳頃より、足の冷え、膝より足の方が、腫れる（むくむ）。リンパの流れが悪いと診断。左足の方は、2回骨折し大手術した後遺症ではと云われ、漢方薬で大分軽減している。

63　63 歳　女　母親が長崎で被爆
小さいころケガをすると化膿しやすかった。母が原爆の影響だと言っていた。現在は特に症状はない。

64　75 歳　男　父親が広島で被爆
共通する症状を父の被爆と関連付けて考えたことはなかった。

66　62 歳　男　母親が長崎で被爆
未熟児（編著者注：現在は低出生体重児と呼ぶ）として誕生。すぐにお腹を壊すため、子どもの時には刺身などの生ものは一切食べさせなかったとのこと。そのため大人になっても刺身を美味しいと感じることはない。
身体を動かしたり、食事の際、他の人より数倍程度、発汗する。
また、常習的な頭痛があるため受診し、偏頭痛と緊張型頭通と診断された。

67　55 歳　女　母親が広島で被爆
幼少時より「自家中毒」を何度も患った。
成人してからも吐くことが多く、血圧と関連している。もともとの血圧も低く（60/90）、さらに下がると嘔吐しやすい。夏は特に運動後に嘔吐することが多い。夏の昼寝のあとに吐きやすい。
ケガをしたとき、指先から血を出すと、血圧が下がり、嘔吐。

胃潰瘍2回
股関節脱臼で生まれてきた。足首の捻挫が多かった。
バレーをやっていて、ひねっていた。10歳ぐらいまで。小さいから躓くことが多かった。
まぶしがり。クラス写真をとると一人だけまぶしがった顔をしていた。写真でいつもひとり顔をしかめている。外でのフラッシュの無い写真でも。
腹痛、下痢はなし。そこにいくまでに吐いていたからか口内炎がすごくできる子だった。
30代ぐらいまでは口内炎がよくできた。小さい時はちょっと調子をくずすと2、3個できて、それがつながったりした。
車酔いがすごい。
血液の量が弱いのではと漢方医にいわれたことがある。
寒がり。 血液検査で白血球がひっかかる。 低め。

いまでもすごく寝る。8～9時間。 熟睡する。忙しくて睡眠を削るとたちまち倒れる。
子どもができなかった。分からないままにしておきたい気持ちもある。
鼻の粘膜が炎症をおこすが、これと言うアレルゲンがない。 鼻腔の炎症が慢性化している。
子どものころから手足が冷えやすい。ホットフラッシュがありがたい。

胃痙攣は高校生、胃潰瘍は20代、30代
最近、風邪をひきやすい。

69　66 歳　男　母親が長崎で被爆
出生時体重1900g。母はそのことで産後うつになった。

先天性の心臓弁膜症で、不整脈、貧血・動悸、息切れがずっとあった。
50歳の時腸閉そくで1．5m 腸を切除。救急車で運ばれ、遅れたら死んでいた。
54歳　僧帽弁が千切れ、呼吸ができなくなり救急搬送。一時、心停止。弁の手術により生還。
62歳の時、その時にぬい合わせた弁が不調となり人工弁にかえるため、2回目の開胸手術。成功したのだが、心房細動が残り、動悸息切れ、不整脈・（頻脈）に今も悩まされている。

閃輝暗点という片頭痛の症状があり。視界の一点から光の裂目が広がり、全体にひろがって、立っていられなくなる時もある。頻度はまちまちで、月に2～3回くらい。

70　68 歳　男　父親が長崎で被爆

1．生後、黄疸が消えず、胆道狭窄と診断され、通院を繰り返していた。医者からは、小学校入学まで生存するのも難しいと思われていた。
2．小学校～高校　朝礼時に何度も貧血で倒れ、保健室に担ぎ込まれた。通学途中で倒れることもあり、何度か救急車で病院に運ばれた。
特に高校通学時の満員電車では途中でトイレに行きたくなることも重なり、電車に乗るのが恐怖。ひどいときは、貧血に伴って吐くこともあり、全く意識がなくなり、気が付いたら病院にいたことも何度かあった。
3．小～中学校の頃原因不明の（弱い刺激での）鼻血をよく出して、保健室で横になることがあった。
4．幼稚園～小学校の頃、食が細く（食欲がなく）、食事に長い時間要していた。（1～2時間／1回）。給食は食べきれないことが多く、いつもパンは残して持って帰った。
5．小さいころから胃腸が弱く、下痢と腹痛に悩まされ、トイレの回数も多かった
状況は現在も続き、長時間の仕事は建物内（すぐにトイレに行ける）、時間移動はトイレ付車両（東海道線）が望ましく、出張や旅行は不安であった。

6．幼少期、よく扁桃腺が腫れて高熱となり、ペニシリンの注射を打ってもらった。
7．小学校～中学校は、身長が低く、常に身長が低い方から2～3名以内だった。
8．体力、筋力、持久力が弱く、懸垂や逆上がりができない。走るのも苦手で体育は大嫌い。（さぼったことはない）
9．小学校2年の頃、視力の弱いこと（両眼共0．2程度）がわかり、弱視と診断され、分厚い眼鏡を使用。当時は眼鏡使用の小学生は少なくあだ名は「メガネザル」。
10．その後も近視は進み、小学校6年の時は両眼共0．1以下になり、ハードコンタクトレンズに切り替えた。その後52年間、ハードコンタクトレンズを使用。（白内障手術まで）父も強度近視（先天的か後天的かは不明）だったので、遺伝の可能性はある。

11．50歳代の頃から定期健康診断の度、眼科の指摘あり。
強度近視の為、網膜剥離や緑内障、白内障等の疾患が発生する可能性が高いので、定期的に眼科に通院。
12．60歳の時、眼科で左眼の網膜裂孔と診断され、網膜光凝固術を受ける。この頃から白内障の症状が顕著になり、視界に影響が出始める。
13．63歳の時には、白内障の症状で通常生活に影響が出るような状況なので、両眼白内障の手術を受けた。その時多焦点レンズにしてメガネの不使用を希望したが、強度近視の為、多焦点レンズは安定しにくいとのことで、単焦点レンズを勧められ、 メガネを併用。
14．ほとんどの白内障手術は日帰りで行われているが、強度近視なので異常事態の発生の可能性が高いとのことで、念の為3泊4日の入院をし、両眼の手術を行った。実際に手術当日の夜中　角膜に強い痛みが発生し、緊急で深夜に診察して頂き、痛みが治まった。日帰りだったら救急車の世話になっていた。
15．40歳代の頃から強い花粉症になり、特に眼の症状がひどく、ハードコンタクトレンズを使用していることもあり、目薬とゴーグルを使用しても、涙ボロボロの状態だった。（毎年2～5月）現在はハードコンタクトレンズを使用していないので、多少は軽減されているが、目薬とゴーグルは手放せない。
16．50歳代の頃、たまたま測定した骨密度が低く、骨粗しょう症レベル。今迄肋骨骨折4回、膝蓋骨骨折1回と骨折をした。

17．30歳の頃突然血尿があり、検査の結果尿路結石と診断され、その後、何度も結石による痛みが発生して苦しんだ。その結石が排出されても、次の結石が現れて、痛みを繰り返した。
18．小学校6年生の時、鼠径ヘルニアの手術を受けた。65歳になって2度目の鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術を受けた。
手術後、尿用のカテーテルを本来ならば翌日外す予定であったが、大変苦しくて我慢できず、無理を言って当日夕方外してもらった。また、退院してからも時々下腹部の強い痛みが残っている。
この2点の状況は、森川氏が2020年7月に受けた、鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術後の状況と酷似している。

71 57歳 女 母親が広島で被爆
私の場合、広島原爆二世のキャリアで生まれ、幼少の頃は良く吐いてた。熱をよく出し病院が友達の時期があった。
20歳をすぎ、出産をするが体内で子供が細胞異変を起こし妊娠6ヶ月で掻把（そうは）術を受けた。子どもは無理かと思う状況だったが2人出産。下の子は3ヶ月で川崎病を患った。
その後、仕事の関係で栃木県に住んだ時に3．11の時に福島原発事故によって、1年後の会社の健康診断をもとに原発症と言われる。アルドステロン症、高血圧症、糖尿病甲状線天性症など軸に視力底下や体質が変わりアレルギー体質になる。
小さな症状がたくさんあり一文では書ききれない。
今は肥神経やうつっぽい症状を感じるようになる時もあり、只今検査中。

72 53歳 女 父親が長崎で被爆
夏になると食欲がなくなり、ぐったりするのは毎年。やけどやしもやけはグジュグジュが続き、痕はなかなか治らない。蚊に刺された痕は冬まで残り、よく「なんでそんなに痕が残るの？」と聞かれる。他の人は残らないのかと不思議に思っていた。
夏と冬は子供の頃から苦手で体があまり動かない。よく気のせいだと言われたが、本当にしんどくて、自分を責めることがよくあった。低体温もよく起こし、吐き気が起こり、食べたものを全て吐いてしまう。きつい頭痛も起こる。
貧血がきつく、鉄剤を注射してもらっていた。

月経はほぼ不順だった。受験など緊張状態になると止まってしまい、半年ほどないこともあった。排卵の時には低体温で吐き気と頭痛が起こり、一晩中うなされることが常だった。おりものが常に多く、「良い菌が膣の中にないため」と言われた。
妊娠した時、2度とも初期に出血し、流産に脅えた。トイレに行っても出血するので、ゆっくりゆっくり移動し、1～2ヶ月過ごした。医師に「体質かな」と不思議がられた。
娘は手の根元の間接が中指と親指以外、曲がらない。私も小指の根元の間接が曲がらない。

私も子どもたちも汗の量は多くて夏はいつも周りに驚かれる。
夏の暑さ、日差しに弱いので、夏は良く身体を休めるようにしている。
中学の時。突然鼻血が大量に出る時期があり、外に出かけられない時もあった。
上の子を妊娠中にも同じように。娘もちょうど東北の震災の夏に同じように毎晩のように大量の鼻血を出して心配をしたことがある。息子の顔のあざや娘の指が曲がらないことなど、私の食生活が悪かったのかなど、幼い頃はよく考えてしまった。原発事故のときにはこれ以上被爆してはと脅えた。レントゲンなども極力控え、食生活や化学物質を気にして育てたのも三世だからという思いから。

73 57歳 女 父親が広島で被爆
私自身のことで言えば小学校低学年の頃までしょっちゅう発熱（原因は風邪だったり、扁桃腺炎だったり中耳炎だったり）していた記憶がある。小学校2年生あたりまでは月1ペースで学校を欠席していた。

74 69 歳 女 父親が長崎で被爆

鼻血が止まらなかったのは中学時代。 毎朝1～2時間ほど洗面器が真っ赤になるほど出血。 高校入学前に鼻の血管を焼き切って止まった。
被爆者である父も鼻血をよく出した。
被ばく三世の息子も被ばく四世の孫も鼻血をよく出す。
息子の鼻血は、母親同様に血管を焼き切ってからおさまった。
孫は原発事故のときに横浜市で胎内被ばくした可能性あり。

中学時代に皮膚病が何ヶ月も治らなくて困った。高校時代に帯状疱疹が治らなくて困った。中学高校時代に学校から帰ると疲れ果てていて、夕食前に眠りこんでいた。
赤紫というより紫の紫斑がこぶし大の大きなものから小さなものまで出た。
体育の授業で時々ついていけないほど疲れた。体育会系の部活が続かず、 いくつか部活を転々として結局文科系の生花部に行き着いた。
息切れはごくふつうに坂道や階段を上るときに感じていた。 それが普通だと思い込んでいた。普通ではないとわかったのは40過ぎてから。

鼻血は物心ついたころから日常茶飯事。貧血で低血圧。貧血が治ったのは妊娠時に増血剤を服用してから。血圧は今も低い。最高血圧85～95程度。
子どもの頃、めまい以上に車酔いがひどく、乗ったとたんに吐き気を催すことが多かった。甲状腺の専門医に甲状腺の細胞が珍しい形をしていると言われた。

妹のひとり白血球数が2，000ほどしかない。
甥（被爆三世）が血小板が少なく、手術後の止血に手間取る。

75 59 歳 男 母親が広島で被爆

母、私共に喘息の治療を長く受けた。発作が起きるほどの症状が出なくなったとはいえ、風邪をこじらせると熱が出て、喘息の発作のような息苦しさが続く。また 私の知る限りだが、母は白内障の手術を受けたほか、股間接の一部がレントゲンで壊死（複数の医師に診てもらったが原因不明）していると言われ、杖が離せなくなってしまった。

76 41 歳（被爆三世） 女 祖母が長崎で被爆

2650g で熱をすごく出した。母が「身体が弱い子だ」と思っていた。そのため小さい頃にたくさん薬を飲まされている。
子どもの頃は元気だった。慢性的な便秘。コロコロするウンチ。「おむつを替えることがほとんどなかった」と母が言っていた。玄米を食べるようになってから治った。玄米を食べないとすぐにコロコロになり、つまりやすい。
21歳の時に急性腸炎で入院。急にお腹が痛くなって救急車で運ばれた。薬を飲まされても治らない。大きい病院に行ったら即入院。腸壁が全部出血。トイレにいったら明るい鮮血が出た。
20代前半で添加物などに身体が耐えられなくなった。皮膚に出てきて顔が全部荒れてしまう。そこでステロイドを飲んでとめていた。対症療法を20代前半まで続けた。

10代は大丈夫だったけれど、22歳から30歳ぐらいまで、とにかくだるい。しんどい。でもそれが普通だから大事に捉えてなかった。その後、食事療法などでようやく自分の状態が見えてきた。大分よくなったがとにかく虚弱。背中に汗をすごくかく。いつも何か違和感がある。そこからの解毒を水素水で行った。オーガニックライフ、玄米菜食で対処してきた。本当にしんどかった。
いまでもよくぶつかったり、手に何かを持ったら落としたりする。機能がズレている感じ。距離感を間違える。小さい頃からずっとある。お父さんに怒られた。転ぶまではいかないが若干ズレている。何かを持った時にミスる。むっちゃ怒られた。「わたし、ちゃんとやってんだけどな」と思ってた。父が理不尽に怒る人でよく怒られていた。

私と父は鼻炎だった。朝起きるとブーンと鼻をかむ。でも私は食べ物を変えてから治った。手と足がべたべたで油っぽい汗をかく。食べ物を変えたらなくなった。
うちの父は足がべたべた。「あんたら二人が歩くと廊下が曇る」と言われた。でも食べ物を変えたらなくなった。

めっちゃすっきりした！この気づきが私にとってギフトだ。
足はいまでもストレスがかかるとベタベタになる。靴下が濡れてしまって逆に冷える。靴下の替えが必要。それ被爆だったのか！面白い！「まじか！」という感じ。

目はよかった。ストレスの自傷なのか、耳をかき過ぎ傷つけてしまう。カサブタをとってしまう。それでいつもグジュグジュしていた。小学校のなか頃から中学校まであった。ストレスで爪をはがすこともあった。
父も母も精神的な DV が多かった。怒ると暴言を吐く。気が狂ったようになる。父もいつ怒るかわからない。いつ怒られるかすごくビクビクしていた。爪をめくると痛みを軽減しようと気持ちよくなるものがでる。ストレス解消からやっていた可能性がある。

「あけましておめでとう」というと「お前お金大丈夫なんか」と答える。「おめでとう」に答えてくれない。そんな形でいつも会話がずれる。父の兄も変わっていてズレている。天才的に数字に長けている。

いったん暴走すると止まらない。娘（従妹）を殴り続けて、鼻血を出しているのに殴るのを止めない。私の父は殴りはしなかったが。従妹はすごい殴られていた。血まみれになっても分からない、止まらない。父も人が変わったように暴言を吐く。幼少期から26歳まで。同居していた間ずっと。
それで私が発狂し、誓察が来た。錯乱して、あまり記憶がない。頭から水をかぶるのが止まらない。理性が完全に崩壊。暴れて家のものを壊した。
子どもの頃に良い子で「あれをしちゃだめ」とかに従える子だった。でも「愛されてない」と思っていた。いまはちゃんと衣食住を提供してくれたので愛されていたと思うが、その実感が乏しかった。大切にされた記憶がない。
父は私が発狂してやっと「俺に問題があったのか」と気が付いた。でも父は私を大事にした記憶がない。私の個性が愛せなかったと語っている。スーパーで子ども返りして、窓を叩いたり、さわいだりした。家の中で傘をさしたり、電車の中で泣いたりした。「傘が守ってくれるんだ」と思って、ご飯を食べる時もさしていた。それで父と母がやっと気が付いた。

25歳の時に玄米菜食をはじめてそれで治していった。向精神剤を飲まなかったのが幸いだった。父は酒を飲むと、「草木の匂いがする」といい、すごく飲んで違うチャンネルに入る。父は18歳から糖尿だった。手足がベタベタ。いまは痙性斜頸（頸部ジストニア）という病がある。神経が足りない？首が横に曲がってしまう。

すごいなあ。面白いなあ。いま魂がとても喜んでいる。紐解かれていく、謎が解かれていく感じ。この可能性があるよというのがとても面白い。めちゃめちゃいまこの時間に充実している。

鼻の上の右側の方に腫れがある。冷えはけっこうある。ただ若い時に肌を露出して、けっこう冷やす生活をしてしまったせいもあると思う。足がベタベタになるので靴下が濡れて冷えてしまう。あと背中にだけすごく汗をかく。それはいまも治らない。毎日風呂にはいっている。汗がかけないとかではない。背中だけ汗をかくので T シャツが濡れたりする。

冬が苦手。100％嫌い。辛い。生きているのが嫌になる。冬は固まって動けない時がある。ずっとだるさをもっている。身体が重い。動きにくい。動くときにがんばらないといけない。年に数回、心身が疲れる。夜型で昼は弱く夜が強い。
21歳の時に急性腸炎　医師が驚いていた。生理で経血がどろっとしていたが水素水を飲んでさらさらになった。水が欲しくなるときが多い。水を持ってないと怖い。

両方の下あごの犬歯から神経が飛び出ていた。その先にエナメル質がかぶっていたがそれがけずれてやがて

激痛に。治療した。
右の下の奥歯がない。その上の歯を削った。

働きにくい。動けなくなるときがある。
スイッチが切れる、まさに「ブラブラ病」などで言わる通り。友だちと話していて止まった感じ。記憶がなくなる。
変わった人と思われたり心配される。

77 55 歳 男 父親・母親が゛広島で被爆
子どもの頃は、風邪を引くとすぐに、喉がゼイゼイなり喘息のような症状に陥っていた。お腹が弱くしょっちゅう下痢に悩まされてた。生まれた時に先天性食道閉鎖症という病気を持っていた。食道と胃が繋がっておらず、途中で塞がっている状態だった。生後2週間で手術。妹と弟がいるが二人にはこういった異常全くない。

80 48 歳(被爆三世) 女
母(被爆二世)が弟を流産している。

82 69 歳 男 父親が広島で被爆
4～5歳の頃、家の中で遊んでいた時転倒等わずかな衝撃で右肩鎖骨骨折。
20代以降、転倒、打撲など必ずしも激しい衝撃でないにも関わらず、左肩鎖骨骨折、右上腕骨骨折、手指骨折複数回等を経験。 骨折しやすい。手指、足の甲などの靭帯損傷を複数回経験。
睡眠不足、胃腸不良、蓄積疲労などと連動して、頻繁に口内炎、歯肉炎等口腔内の発症傾向。 歯茎も出血しやすい。 歯茎用歯磨きを使い、 ポイント歯ブラシによりマッサージを行うことで軽快に努める。
60歳頃から手指、爪周辺などに湿疹やただれ。 消炎剤や抗生物質などにより対処。

40代後半頃から、以前よりさらに風邪をひきやすくなり、それがエスカレートし、季節を問わず、1年のうち8～9ヶ月もの間、次々と風邪をひくようになった。風邪をひくと、だいたいこじれ、副鼻腔炎を併発し、鼻から黄色の膿が排出されるなどした。
55歳の頃、20歳頃から飲用していたクロレラに加えて、プロポリスを飲用し始めてから、逆にほとんど風邪をひかず、ひいても養生することで早期回復するようになった。今もプロポリスは継続飲用している。
目が疲れやすく、それが17歳時発症の非定型顔面痛の原因の一つと思われる。
眼鏡着用に伴う顔面痛などにも常時悩まされたが、対策の一つとして40歳のとき、RK 近視矯正手術を受け、視力は両目とも0．04から0．8くらいに…、眼鏡不要となった。しかし、45歳頃から老眼が始まり、事務作業や読書などには再び眼鏡が必要となり、これに伴い、顔面痛が悪化し始めた。60歳の時、再度手術を検討。白内障手術により、多焦点レンズを入れれば遠近両方とも視力が得られるが、過去に RK 手術を受けている場合は、単焦点レンズしか入れることができないため、視力0．4に合わせたレンズを入れ、やや近視の状態を確保する手術を行なった。これにより、運転時や不慣れな場所への外出時等以外はほぼ眼鏡不要、眼精疲労と顔面痛もかなり軽減された。
10代～20代、白血球数が少なかった(2800～3200)。 クロレラ飲用後頃から徐々に解消。
＊上述後、鼻漏については、50歳前後の頃、レーザー手術を2回受けることでほぼ解消した。ただ、常時副鼻腔炎ぎみの兆候はある。

83 62 歳 女 父親・母親が広島で被爆
右手に異常があり、生まれてすぐ、被爆者で歯科医の祖母に発見され、全身麻酔で手術を受けるが、当時、乳児を完治させるだけの技術はなく、仮の手術でもっと大きくなってから本手術を!というもので、その後、右手があまり使えない生活を送る。4歳からピアノを始めたことでリハビリにもなり、結果レントゲンをみる限り完治、少し感覚は違和感がある。疲れればその指の動きは鈍いし、かばえば別の指が痛み出す。
39度～40度の高熱を幼児期～小学4年位まで1学期に1回は出て1週間近く学校を休む。中学になってもたまにあったが、雨の前の午後から、体、特に下半身の関節という関節がミシミシ、キシキシと痛み出し、耐えられない痛みで立てず。ひたすらひいひいと泣くしかない。何も食べられず、泣き疲れて眠る。 丁度、透明人間

がやってきて、痛いという関節を全部グリグリと雑巾搾りをするような痛み。

小学5年位から、夜になると毎晩、ひどいじんましんで眠れず。6年の修学旅行前に主治医に一週間、静脈注射を打ち続けて何とか一度は治まる。そこら辺りからアトピー性皮膚炎が始まる。 またたぶん6年生の時、種痘で殺されかけた。1週間39度下がらず。もうろうとしその症状を後にFBで書いた。医師の方から「よく障害が残りませんでしたね、死んでもおかしくなかった」と言われた。
小学3年頃から冬が冷え症で、しもやけが酷くなった。高校生になってもしもやけが足にできて、よく笑われた。低体温は現在まで。徐々に下がっているようで34℃の時もある。

85 42 歳（被爆三世） 男 祖母が広島で被爆
母が弟を流産している。弟が幼少期にてんかん発作をおこしている。
自身は慢性アレルギー鼻炎がある。また、小学生頃に霰粒腫（さんりゅうしゅ）がよくできた。条件はわからないが手のひら・足の裏に汗疱（かんぽう）がよくでる。原因は不明。

86 不明 両親が広島で被爆
39歳で甲状腺（良性）手術。右側を全摘。現在、甲状腺機能低下症にて薬を服用。

87 59 歳 女 両親が広島で被爆
子どもを妊娠時に貧血になり、それから治療、しばらく経つと貧血、治療を繰り返し、ここ10年くらいはサプリメントを常用。2017年、乳がんになり、化学療法、手術を経て、現在進行形で治療中。

89 71 歳 女 母親が広島で被爆
ケガをして傷が治りにくいことは子どもの時からずっとだった。今は感じない。ケガをめったにしなくなった事もあるが。体を少し物にぶつけただけでも青く出血していた。
下痢はよくあった。小学生のころ、特に夏は疲れやすく、すぐにグッタリしていた。近所に住んでいた子どもたちは元気だったが、私たち兄弟とは違っていた。父親が「うちの子どもは元気がない」とか言っていた。
60歳前から血圧が高くなった。それまでは普通。目のピントが合わなくなり、プリズム入りの眼鏡にした。近視・乱視は中学生の頃から。ここ3年くらいどんどん見えにくくなり、プリズムもこれ以上入れられないところまできているので困ってる。右目の筋肉が縮んでいると、眼科で言われた。

自分の体は自分で治すことをモットーにしている。食べ物・石鹸・シャンプー・その他色々気を使っている。体を冷やさない事・食品添加物を避ける、水に注意する、電磁波に注意する、その他色々やってて、現在とても体調が良い。
小学生の頃、特に夏、ずっと頭が痛かった、痛くないという状態がどんなのか分からないくらい。

91 75 歳 男 母親が広島で被爆
転んで膝などすりむくと、必ず化膿して外科を受診していた。

95 66 歳 男 両親が広島で被爆
森川さんがこの本を書かれたことに、後生を生きる人間にとって感謝と勇気をもらう思いがありました、厚くお礼申しあげますと同時に、森川さんが、少しでも元気に過ごされようお祈り申しあげます。
幼少期、原因不明の脳震盪で入院したことがある。その後も20歳になるくらいまで年に1回くらい起こっていた。入院はしていないが、頭がしばらくまひするような痛みで、身動きがとれなかった。

96 58 歳 女 母親が被爆
二人目の子供、頭～お尻にかけ背中に水泡があり、育たないとの診断　中絶

97 56 歳 女 母親が長崎で被爆
小さなころから関節痛がひどく、幼稚園で遠足など少し長距離を歩くと股関節から下が原因不明の痛みにおそわれていた。歳を重ねてもそれは続き、現在も関節痛と縁が切れることはない。首、腰は椎間板ヘルニア、軽いアレルギー症状、気管支炎やぜん息とはうまく付き合っていくしかない状況。医者通いは続けている。
50歳時、母と同じ甲状腺乳頭がん。大腸、肝臓にポリープがいくつもできたり、腎臓に石がたまるなどの症状。関節痛は、娘2人にも出ており、成長痛とは違う痛みがあり、原因不明の体調不良（頭痛・眠りの浅さ時々の下痢）も親子で続いている。

ノンレム睡眠がないので、常に周りの音が聞こえる状態で最近まで寝ていた。そのためだと思い込んでいたが、特に夏場は毎日、吐き気・めまい・頭痛に悩まされ、雨の前は特に首から上をはずしたくなる状態が続いた。中1～高3まで、神経性胃炎、公式戦前は40度の発熱が毎回。
歯は子どもの頃にエナメル質が全然ないと言われ、ボロボロだった。

22歳の時、自律神経失調症の診断を受ける。体温調整がうまくいかず。
20歳から月経が2ヶ月で3回くらいくることが続いた。2年ほど。閉経は49歳。
月経不順あり。ひどい時は五分立っていられない量の出血。

98 53 歳 女 母親が被爆
「長男」は、視覚過敏・聴覚過敏を持つ、多動性障害を持ってる。「長女」は、お腹が弱くすぐにお腹をこわす。週に3～4回は腹痛に悩まされている。長女は頭痛もち。週2～3回痛みがある。
潰瘍性大腸炎を28歳から発症。36歳で確定、37歳で悪化。アルコールを服用し安定。
現状は直腸付近の炎症にとどまっている。
幼少期は鼻血がとても出やすい体質でした。20歳を過ぎてからはあまりでなくなりました。
健忘症、45歳ぐらいから目立ち始め、51歳現在、自分でもおかしいと思うほど、記憶力が低下している。

99 73 歳 男 母親が長崎で被爆
小学校にあがるまでに三度死んだと言われていたが、その要因・原因・症状はわからない。母に確認したがったが、する前に他界した。ただ僕の60歳まで大変心配していたのは遺伝的影響を懸念していたと思われる。そのためか、小学校にあがると、子供用自転車を買ってもらい、毎週日曜日は母と一日がかりの遠距離の遠出をしていた。（多分片道15㌔ぐらいか？）
母は当時小学校の養護教員だったので、放課後に上級生の野球チームに入れられトレーニングを積み重ねた。そのような体力作りをしていたが、胃が弱く、下痢が多く、また貧血で全校集会等ではよく倒れた。食事・投薬の対処は母の管理の下に行われた。この状況は中学校2年生まで続いた。
大学入学で上京したが、健康管理の重要事項をいわれ、当時から年1回の健康診断を義務化（35歳からは人間ドッグ）、その結果を母に送るのが常であった。このような経過できたので、本人としては体の変化（異常）については敏感で、変化があると何かしらあると思い、日常生活に支障をきたさない範囲でよく寝込んで変化が通り過ぎるのを待つ習慣が身についていた。結果大学から今日（近々71 歳）まで大病を患ったことがないのは母の管理の結果か。

3人目の子が6ヶ月で流産（二世だからとは思わないが）。

100 48 歳 女 母親が広島で被爆
母も第一子は胎内で「ぶどうっ子（泡状奇胎）」で出産できなかった。体が動かなくなったのは、40歳過ぎてから父に話した。その当時は言えなったが、動かなくなるとは言ったことがあった気がする。アンケートの中も父と話したが、父も似た症状があり「遺伝かもしれない」との話になった。
「短距離走」でスタートできない、「ゆたに見てもらおうか」と友達に言われて傷ついた。通知簿に担任が「起立性調節障害」と書いていた。

動かなくなる症例など、あまり人に言えない。人に言えるようになったのは40歳過ぎ、それが二世に色々とあると聞いて、勇気が出た。私だけではないということで、安心、発見があった、心強いと思った。
沖縄では冷凍食品が多かった。日常的に食べていた。学生になって親元を離れて、自分でつくるようになった。加工食品をあまり食べなかった。出汁もとるようになったら、体調が楽になった。

小学校のときの目のチカチカについて、病院で色々と調べられたが、「特に悪いところはない」と言われることが多かった。こっちはめっちゃしんどいけれど、「偏頭痛かな」と言われるのが嫌だった。辛い状態を認めてもらえないことが又辛かった。いまになって、あの症状が、ぱっと病名がつかないものだったことに納得がいった。やっと辛かったことを認められた感じだ。

101 63 歳 男 両親が広島で被爆
私は未就学児の時はしょっちゅう腹痛を起こし、小児科で診断され、ペニシリン注射の治療を受けていた。小学5年の春頃から曇天日雨天日に後頭部に周期的な頭痛を感じるようになり、9月に日赤病院に「ウィルス性髄膜炎」と診断され、2週間入院。脊髄の髄液中のウィルスが減少し退院したが、特徴的な頭痛の後遺症は中学生になっても残り、母親がかかっていた鍼灸師に三叉神経への針治療を受け、高校通学時に完治。

104 77 歳 男 父親が広島で被爆
脱腸で死にかけた。たまたま「名医」が庄原市に来ていて手術で助かった。
私の子ども二人（長女、長男）とも脱腸であった。共に手術をし、現在は健在。

105 73 歳 女 母親が広島で被爆
幼少の頃は？よく発熱。風邪を引くとすぐに声が出なくなり、こじれて長引き学校を休む事が多かった。
三世の息子が。ばね指で13の時に手術をした。
私の叔母（母の妹）も、母を探しに広島に入り被爆。妊娠を中絶し、その後も子供に恵まれず、いろいろな病気にかかり、とにかく体が弱かった。
脳が萎縮すると急に血圧が上がり、体が膠着するという。
引っかき傷や擦り傷を放置していると化膿し、現在もその状態が続いている。盲腸の術後、糸が吸収されず化膿して半年後に手術した。
幼少時から今でもとにかく風邪を引くと厄介で、慢性気管支炎とぜん息になる。微熱が1週間以上続く。
幼少の時から冷え性で、蒸気機関車に乗ったり、急に暖かいところに行くと、ほっぺが真っ赤になった。手足は冬場はしもやけで毎年悩まされた。今でも年をとるにつれ、 春秋がなく冬の厚着から急に夏になるようにいつまでも厚着をし、人よりも多く着るので、スカートや薄着ができないでいる。歳を重ねるごとにひどくなってきている。
いつも胃の調子が悪く、体力がなく便秘気味であった。人よりも給食を食べる量が少なく、たくさん食べれず、幼稚園の時、泣いた記憶が鮮明にある。
子どもが二人いるが、長男は私に似た体質とにかく体が弱く、体力がなく、部活動をみんなとついて行くのが大変で、食欲は少なく、とにかくやせていた太らなかった。

18から20代後半にかけて体がだるく胃が重く、嘔吐があり、とにかく体が動けず、会社を休んだことが1年間に1回必ずあった。周りからは、妊娠しているのではと疑われた事もある。二日ぐらい体を休めると治り元気になる。この症状は自分でもまた起こってきたと感じる20代の症状でした。

小学生高学年まで特に低学年まではやたらと火照りがあり、顔が異常でした。小さい時から汗は夏場でもあまり出ないので、冷え性、冬が苦手。 著しく寒がり。

結婚当初は主人に仮病を使っているのではと思われていたが、体力がないことがわかり、いまでは疲れないように気を使ってくれる。

無理をするとガタっとくる。無理が利かなくて被爆者である母、私、息子、長男がみんなそうである。体力が全くない。

30代に私は歯科大学に通いづめ。歯根炎を起こし、骨膜炎の一歩手前まで。抜歯の本数多い。

小中の時、朝礼で倒れるので、倒れる前にかがみ込んだ。

私も姉も小学校に上がってからもおしりから体の湿疹に悩まされ、年がら年中おできに悩まされた。特に私は顔にできるのが並行した。姉は小6の修学旅行までには直さないと母親が随分心配していた。

高校生ぐらいまで小さな傷で膿みやすく、おできもできやすかった。通院するほどではないが。小中学生の時は下痢しやすかった。
妹二人は流産が1、2回、息子の連れ合いは体内で成長せず、流産1回。何れもその後出産を経験。
幼少期アレルギー性副鼻腔炎、蓄膿症。50代蓄膿による味覚障害約十年、漢方薬で改善。
妹が長年喘息で苦しんでいる。50代椎間板ヘルニア。頸椎。腰椎。
65歳で慢性硬膜下血腫の手術を受ける。20代で胃潰瘍。 発汗過多。息子も。
肝機能、正常値越え。肝脂肪は30代から。高血糖値、50歳代から。メタボ状態でもある。現在も継続中。

107 65 歳 女 母親が広島で被爆

夏も辛いが梅雨も辛い。人の何倍も疲れやすい。疲れるととにかく寝てしまう。それも気を失ったように寝る。1週間ぐらい寝ていることもある。根気が続かない。
皮膚が弱くすぐに傷ができた。
ティッシュ BOX2箱をつかうような鼻水がでた。冷房や冷えにとても弱い。突然動けなくなることも。50歳で微小血管狭心症に。冠攣(冠攣縮性狭心症 かんれんしゅくせいきょうしんしょう)。咳がのどの奥からこみ上げてくる。
もともととても冷えに弱い。雨にうたれただけで体調がかなり悪くなる。
常習下痢、嘔吐、手足の冷え、汗が出にくい、著しく寒がり、暑がり根気が出ない、能率が悪い、作業意欲がわかない、音に脅える、風に対する恐怖がある。

109 74 歳 男 父親が広島で被爆

先天性の心臓病 (心室中隔欠損症)で 、幼稚園に行く前は、病気がちで、当時は高価なペニシリン注射や薬の投与で、親は多額の治療代の負担で苦労したと思う。 ただこれが原爆によるものかどうかは聞いていない。
小学校に上がっても病気がちで、心臓に負担のかかる水泳、マラソンは授業を控えるよう教えられ、そうしてきた。 中学校に入ってからは病気は少なくなり現在に至っているが、冬は風邪をひきやすく、こじれることが多かった。
心臓の欠損の程度を調べるため、就職後の22歳頃に京大附属病院で、会社を1週間休んでカテーテル検査をしたところ、穴は小さくないので手術を勧められたが、その時点で日常生活で何も困ることはなかったので、今後、苦しくなったりした時に穴を塞ぐ手術をすることで、結局検査以外は処置は何もしなかった。
その後、子どもの時と違って、少々の激しい運動をしても苦しくなかったこともあり、社会人になってからテニスや登山を普通の人と同様(若しくはそれ以上に)にやっていた。
なお母親からの遺伝と思うが、30歳頃から血糖値が高く、糖尿病の治療 (定期検査と薬の服用)を現在も続けている。血液検査は毎月行っているが、ここ数年前から白血球が、時々標準以下になることがある。
以後、50年近く生きてきたが、元気に生活できている。コロナが流行してから感染対策をやるようになったからか、毎年最低1回は風邪を引いていたが、それもここ3年はひいていない。
身体の異常として50歳後半から腰痛 (脊柱管狭窄症)に悩まされているが、 上記の運動 (テニス、登山)のせいだと思う。
なお私の兄弟ですが、2～3歳上の兄と姉は、生まれてすぐに亡くなったと聞いている。私の3歳年下の弟は、小さいときから身体は丈夫で健康上、全く問題ないと聞いている。(現在広島市内で家族とともに生活)。

　アンケート報告は以上です。
ここまでお読みいただき、どうもありがとうございました。

　読まれてどのように思われましたか？
ぜひ感想、質問、意見などを、私たちに寄せて下さい。

京都「被爆二世・三世の会」
〒604-8854　京都市中京区壬生仙念町 30-2　ラボール京都 5 階　京都原水協気付
TEL：075-811-3203　FAX：075-811-3213
EMAIL web@aogiri2-3.jp

　みなさまのご意見を踏まえた上で、さらにより豊かに調査を進めてまいります。
「私もアンケートに答えてみたい」という方も、ご連絡下さい。
　また周りに縁のある方がおられましたら、このアンケートのことをお伝え下さい。

被爆二世・三世　そして未来世代の健康を守るために
被爆二世・三世健康調査アンケート結果報告書

2024 年 1 月発行
京都「被爆二世・三世の会」アンケート結果報告書編集委員会

500円